

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十一年八月二十五日 印刷
昭和四十一年九月一日発行 (毎月一日発行)
(第一二号)



No. 12

九月号

神経疲労回復剤！



山之内製薬株式会社

東京都中央区日本橋本町2/5

大阪・福岡・札幌・名古屋

バランス

神経も

レジャーがほしい！

- はげしい頭脳労働のため、思考力に疲れをお覚えの方
 - お仕事が思うようにゆかなくて、イライラしておいでの方
 - 重要な交渉、商談などをひかえて、不安なお気持ちの方
- ぜひ、バランスをおのみください。



一〇ミリグラム
六カプセル……………一〇〇〇円
二カプセル……………三三〇円
三〇カプセル……………八〇〇円
(はかに医家向大人)
(包装も異なります)
● お申込しい説明書・試供品を
送呈

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

風光明媚な
海岸美を
誇る

今月のことば

中島生々庵



ち

◎むかし那須興一という男があった。
◎主君の命令で屋島沖に浮ぶ扇的を射落して敵味方の大喝采裡に面目をほどこし、丹波信濃など五個国に莊園を賜わった。

◎もしその時失敗したら、この物語りはどんな風に変っただろうか。

◎日頃武芸修練の程もさることながら大胆不敵ともいふべきで、恐らく矢が弦を離れるその瞬間は、世に伝えられているように南無八幡大菩薩の心境であつたろうことは想像に難くない。

◎親鸞は「無義をもて義とす。不可称、不可説、不可思議のゆへに」と云って小ざかしい「はからい」を無要のものとして禁じたのである。那須興一に偉らい点があつたとすれば武芸の妙技よりも、この心境に徹し得た結果と見るべきではないだろうか。

◎なるようにしか、ならぬわいと投げ出す位が凡人としては関の山だ。己れのまこと己れのいのちを打ちこんで、あなた委せに徹することは容易なわざではあるまい。

◎七月十日第一回の路郎忌川柳大会を催すに際し、あの慶沢園という野外会場を決定したのは「川柳塔」にとつて最も大切なスタートの大会として実に無謀極りなく、将に屋島沖の扇の観があつた。前日まで雨雨雨の日が続き最終準備委員会の時刻にもどしや降り、無義をもて義とする心域にはなかなか程遠い。せめては南無八幡大菩薩にすがるほか何のもでもなかった。

◎さて当日の朝になる。降らず照らず、薄陽に新緑の大自然恵だ。文字通り感涙ものであつた。

(八月五日記)

川柳塔九月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことば……………中島生々庵……………(1)

先輩・後輩……………
——同人特集—— 若柳 潮花・浜田久米雄・長野 文庫・不二田一三夫……………(24)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

近 詠……………麻生 葭乃……………(29)

先生と英語……………吉田 水車……………(29)

いのちある句……………戸田 古方……………(40)

秀句鑑賞……………(前月号から)……………後藤 梅志……………(20)

川柳初篇研究……………(三十九)……………(22)

前田喜代人・岡崎 重義・清 博美・藤井和雄・
川端柳風・故高須啞三味・丸 十府・岡田 甫・

スングアリーのみ……………(大陸放浪)……………東野 大八……………(36)

武田信玄……………(川柳戦国志・四)……………富士野鞍馬……………(38)

痴 盲 録 高 鷲 亜 鈍 (43)

大 陸 望 郷 中 川 晃 男 (37)

雅号ぶっちゃけばなし 木村千容・直原七面山・藤岡花梢・松岡委滄浪 (55)

田中辰二先生逝く 佐 野 ト 占 (47)

近 作 柳 樽 松 江 梅 里 選 (30)

大萬川柳「夕刊」入選発表 清 水 白 柳 選 (50)

金 泥 集 麻 生 葭 乃 選 (41)

初 歩 教 室 菊 沢 小 松 園 (44)

★ 柳 界 展 望 (薰風) (52)

★ 本 社 八 月 句 会 (庸佑) (54)

★ 各 地 柳 壇 (文秋) (58)

一 路 集 「優 勢」 杉 原 愛 鳩 選 (48)
「茶 の 間」 不 二 田 一 三 夫 選 (49)
大 鶴 喜 由 選 (49)



中島生々庵選

路郎忌

大阪市 本多柳志

路郎忌は良し遠来の朋に会え
胸像の目は孫弟子へ笑み給い

路郎忌の不肖の弟子のささの酔い

師を知らぬ人も供花の列に立ち

従いて行く決意へ池の鯉がはね

一粒の麦君死に給う事勿れ

いのちある句はまだ遠し一周忌

路郎忌の記念の柳誌ぬくうち

路郎忌の俺にも仁義礼智信

二十卷川柳雑誌人生譜

満奇洞、井倉洞（岡山県）

大阪市 正本水客

無限から無限へ水のつづく色

宮殿とも地獄絵とも見え洞つきず

鐘乳洞空気よどんだまに澄み

地下水のごうごうとして滝つくる

備中高梁城

櫓あと石垣の跡みどり深く谷ふかき

山城の歴史へ猿が住みなれて

頼久寺の庭

遠州の若さあふれてる大刈込み

吉備高原

蛙の大合唱へ夕焼けが消えのこる

高槻市 若柳潮花

路郎忌川柳大会にて

叱られた量ほど泣けてくる献花

胸像の眼見つめていたら泣いていた
励まして励まし合っている握手

知恵美句集折鶴刊行（三句）

一周忌娘の手で母の句を集め
俳に遣句あり句集手に重し
病床の作さえ逝くと見えざりき
踊り子のなかのひとりを追う櫓

大阪市 後藤梅志

ある時は仏陀の如く澄むところ
金がじゃまになる程あれば困るなり
ステレオの響く長屋の屋下がり
若僧のつく鐘の音に巾があり
秘境あわれ湖底に土台石のまま
風鈴をうらに表にかぜをうけ
しとしと夜露植木屋しまいかけ

岡山市 服部十九平

せいたくな汗を拭いてるトルコ風呂
判捺してから決心がまた変り
腹のない男キレイな嘘が言え
都市計へ居座る一戸旧藩主
腹芸の出納決算書に載らず
庭石を贈られ灯籠位置をかえ

大阪市 中川滋雀

目玉焼位出来る主人に飼育され
殴られているビートルズを見たかった
アジビラと祭りのポスター隣り合い
盗まれもせずに自転車置き忘れ
急用が出来たと飲める方に出る
焦げている匂に止んだ立ち話

宝塚市 小島無聖

何の自信かネクタイきゅっと締め
ドロドロと崩れた魚のように寝る
たしなみを知ってる足の斜めなり
好きな人あるのか無いのか娘ふけ
風呂の湯が股に溜ってまだ老いず
二人の夢まだ残ってる部屋に坐し

高槻市 傍島静馬

家庭教師付けてて放任主義ですの
一電車ズラして掛けて譲らされ
カバーして本をだいいじに読んでいず
紙屑屋五円きばって恩に被せ
おん曹子鳴かず飛ばずを喜ばれ
筆無性郵便値上げ気にならず

大阪市 金井文秋

金置いてなかったかと気を悪くさせ
恋をうちあけるムードになって来ず
入れ替える電柱ごぼう抜きにされ
エチケツトで着る一枚の暑いこと
なんだ子供かと蠅体かわし
人間の趣味に盆栽ひねくれる

出雲市 中川晃男

母よ、

突然の母の死涙間に合わず
死のベッド母の乳房はしなびたり
子に生きて働きそして死んだ母
母の草履もう歩かない土落とす
亡き母の録音テープで叱られる
母呼べば星空に声吸われけり

富田林市 川端東雲楼

亡妻 初盆

わがために蒔ける花かや初盆の
日本海沿岸の旅おえて

海暮れる風と波と私と

旅なれしころ帰り来て梅田地下
せり市であなたまかせの漁夫農夫

やかましい米の値亭主知ってるか
あじさいは午後には午後の色に咲き

普通寺市 岡田拳法

(月一回療養所より自宅へ外泊)

父ちゃんの膝はボクの座ワタシの座
父ちゃんの背中はボクが洗うんだ
結婚八年肩揉む事はうまくなり

自画像一句

分ってるだけどついカッとなり

療養吟一句

何よりも唯治りたいだから臥る

ピカピカのヘルメット大臣様視察

岡山県 浜田久米雄

しん平入院

退院の時は飲もうと見送られ

このおれを見よと鰻はよくくねり

大阪の夏まっ白い蟻の列

地下鉄の空気たらふく吸うてゆれ

旅に出るメモには塵紙までも書き

尼崎市 長谷川三司

人間として人間の恩を知る
習性は哀し部屋の隅に座し

市川団藏の死

団藏の心海だけ知って居る
カバ―掛けられマネキンの真夜中の空虚
お多福にある郷愁の法善寺

児島市 本田 恵二朗

北陸の旅にて

朝の陽に車窓の仮寝覗かれる
伍ビールで車窓の朝のうがいする
特急のほどよき揺れに湧く旅情
弁慶を偲ぶ安宅の松並木
実盛の首洗われた池の澄み

倉敷市 木村 千容

老残の夢ちさけれどほほえまし
誕生日嫁手造りの寿司の味
誕生日鯛の目玉ににらまれる
筍は親に背いて垣根を越し

犬飼亀三郎自費出版祝

郷土史のほまれ筆まめお翁さん

下関市 国弘 半休

増チップみっちり揉まして按摩去り
団地ビル鳩の住まいに似ておかし

川柳の三傾向

川柳がカラー写真に似て美麗い
ポスターを川柳調で詠み直し
新風を入れて締りのない端調

京都市 大鶴 喜由

路郎忌に思う

生駒から見る万代の夕霞み
どや一杯と路郎末座に来
雲を見ろそこに路郎のたまわく
小町寿司京で路郎の舌鼓
俺に似よ俺に似るなと子ばんのう

ハワイ 築山 快夢起

増給が聞かれずサボることにきめ
無難作に医者癒ります癒ります
老妻に伺いたてる蝶ネクタイ
君が代に明治生れの眼がうるみ
病友へ気休め不治とよう云わず

ハワイ 羽佐間 柳葉

明治者世間の義理を捨てきれず
ゴシップの圈外にされ落目なり
座布団も階級順に薄くなり
一杯位宜しいでしようで飲み習い
前歴を語る盃持つ手つき

防府市 長 野 井 蛙

共稼田舎の親の氣に召さず

ヘルメット身代りのように投げ出され

夜の蝶危い橋を渡り馴れ

石頭居るので会社微動せず

再入院して

注射針御免なさいと場所を替え

豊中市 戸 田 古 方

御機嫌になるとスカタンしとうなり

LLのもひとつ上がみつからず

もう一つのボーナス袋書かされる

梅雨明けが待てずに買ったサングラス

歌磨の秘版パラパラ立って見る

青森市 工 藤 甲 吉

うらめしやわずかばかりの金の罪

日本列島端から端へ女墮ち

一枚のふとんに縁という二人

万物の霊長かなし貧富の差

へばりつく屋根の下にもある暮らし

神戸市 仲 どんたく

文明の片隅夜泣きうどん生き

赤紙が酒場から来る夏祭り

見下ろせば我が家も千万ドルのうち

業病と知らず治って飲む話

キャバレーを楽しかったわと追いつかれ

京都市 松 川 杜 的

大仙院にて

叡山石白壁に映えて大仙院

巖町の色をそのまま花鳥図絵

宝船所詮は追えぬ亀と知る

沙羅そう樹白砂に夏の影落とす

今宮神社にて

唐獅子と狐が同居神応殿

愛媛県 村 上 旭 童

血統がよすぎて母と子と犬と

百姓でよかった工場見て戻り

梅雨空のいきなり晴れてあわてさせ

百姓に農休があり昼の酒

その上に隣の子まで来て暑し

岡山県 横 山 一 声

特価品のように男をよって居り

口でこそ百万円とかるく言い

参観日があるらしパーマ屋こんで居る

条件をのむ条件をしめされる

雨もりの場所が変った長い梅雨

岸和田市 内藤きさ子

知らぬふりするので恩に着せはじめ
こんこんと諭せど恋に嘯みつかれ
たわし二個すり減り一年めぐり来る
扇風器味付のりはとびたがり
まあぼつぼつですわは儲けてると見られ

大阪市 西出一栄

飛躍するすべを忘れた兎に似
来た序で有料養老院も下見しとき
聖人故にエピソードとして書かれ

阿茶女史の古稀

古稀とやら不老の秘訣ありそうな

路郎先生の一週忌を迎えて

師の味がこぼれそうなり百句集

大阪市 児島与呂志

横断歩道キッチリ止る子煩惱

狭い家僕が小さくなる育ち

朝顔のつるに末っ子話しかけ

甘やかすつもりも無いけど甘えに來

備前川柳社を訪ねて

腹ばいでとんぼがえりの句を見上げ

大阪市 山川阿茶

世智辛さ夢にも詩にも遠くなり
時は金テレビの野球切られたり
オールスターに出して貰って三振し
持駒へ総花監督気が疲れ
頭うつ雲雀は籠に慣れていず

大阪市 石倉旅風

手枕に遠慮の要らぬ児の寝顔
触らずに見るだけみよと傷を見せ
ご近所の強味弱味をつかい分け
冷静に戻る自信の腹を立て
水やればしずまりかえる植木鉢

大阪市 中島小石

五体揃ってそれでよしそれでよし
一寸でもよい名をさがす親の慾
絵はほめずよい御趣味でとほめて去に

路郎忌

想い出はつきずまさぐる珠数に似て
花ささげこの一年の早かりし

大阪市 橘高薫風

青空に路はありけり恩師の忌
盲滅法馳け出したき恩師の忌

路郎忌に東京の人美濃の人

涼しさや馬の耳ほど聰からず

お嬢さん育ちの良さが二の腕に

平田市 久家代仕男

保健所で蠅を見つけて来た笑

ニコヨンも所得保償がして欲しく

秀才の世事とは凡慮にも劣り

論壇に立てば入歯が邪魔になり

オートメの末は人手をどうする気

鳥取県 清水一保

嫁に欲出来て姑が世をゆずり

植え終えた田の面へ螢群れて飛び

ひげ面を笑い合つて農多忙

お花さんの様には暮せぬ物価高

研修会後は湯が有り酒が有り

倉敷市 野田素身郎

転勤をあゝ娘一人が泣いてくれ

参観日やっぱりうちの子手をあげず

コーヒーも飲めぬ任地で貯めてくる

遺骨も帰らぬわが子に叙歎の沙汰があり

内緒だというのでうっかり信用し

大阪市 宮尾あいき

墓地の草むしるに惜しい緑色

割勘で乗ってタクシー狭く居る

梅雨もよし相合傘で妻とゆく

雨やどり軒に先客くもが居て

坪十万の土地へ雑草えんりよせず

島根県 藤井明朗

うれしい多忙停退閑にせず

玄関で済む用件は妻を出し

(天王寺公園)

公園の一人歩きはけつまずき

路郎忌川柳大会

胸像に川柳魂教えられ

大会の園遊別れを惜しむ酒

豊中市 寺田花宵

亡き子二句

おたがいの亡き子を語る姉妹

愚痴と云う人もあろうが娘の話

歳にまだ負けぬつもり夏の山

町内の義理に浸っている温泉

思い出は一つひとつに植木鉢

岸和田市 植山武助

働ける幸繰返す停年期

ポナスのその日のながーいながーいこと

物入れに困って暑う着る上衣

東京ヘドライブ

着いてみれば東京も遠からず
大阪のナンバープレートへ話しかけ

名古屋市 吉田水車

白百合の律義に咲いてあわれなり
苦しみを一手に負うも親の慈悲
エレキギター感電したのかと思ひ
手紙にもワタスワタスと書いてあり

大阪府 早川清生

後妻に來 通知簿一点にもこだわり
市営住宅市を愛さない人を寄せ
出勤路いつかジंकウスめいたもの
この頃の妙に女の葬儀見ず

兵庫縣 小西無鬼

鼻糞は丸めてはじくものらしく
両替にたばこを購うて下さった
十円を値切る淋しい心見る

大阪に泊りて

空気の少ない大阪の寝苦しく

高槻市 福田丁路

安全確実有利は夢でした
変人の変人らしい苦笑い

一輪の路傍の花へ眼鏡ふく
花は良し花いっぱい枝の夢

岡山縣 直原七面山

胎教の効果利口な子が産れ
三回目ともなれば悪阻へ驚かず
釜ヶ崎に潜り時効の日を待つ氣
お役所の趣味役付をまた拵え

門真市 福島鉄児

有り余る金持ち勝手つんど居
出て行けと云われ出て行く荷をまとめ
まだ相性家柄などともたつかせ
羊かんの端へは誰も手を出さず

加賀市 那谷光郎

金策がなつたうれしさバーへ来る
画架立てて今日は画伯だ休診日
妻の手が夜更し碁盤も拭いて置き
灸据えてもう生き飽いた年令なれど

大阪市 水谷竹莊

十円で長い話の赤電話
万歩計歩くに京の寺はよし
壺の花かえて嬉しい客を待ち
あいさつがすむまで仲居待たされる

加賀市 大山雅城

鶏の逃げるけたたましさに呆れ
よそさまの味はどうしてこう美味い
脂っこいものがすき瘦せている
胸算に合わせぬ勘足でも払い

竹原市 山内静水

拝まない仏像床に座らされ
ほめ言葉素直に聞けて嬉しい日
しぶうちわ片手は汗をふいてくれ
薬湯へ骸骨みたいな首が浮き

室戸市 奴田原紅雨

鯉のぼり亜細亜晴れたり曇ったり
口ひげが生えて来そうな妻と住み
氷のような男になった訳があり
父の日の父後悔があるばかり

岡山県 藤原秋月

農繁期ひげもこんなに伸びました
耕耘機牛も時世を感じていた
美人画と妻の寝顔と見比べる
出した手を笑ってるよな自動ドア

芦屋市 丸川初甫

雨の日の投函ポストに傘をきせ
降ってまずかも挨拶の中に入れ
改札口眼と眼と合った迎え傘
地下街を見物してる雨宿り

岡山市 江国幽谷

おもちゃ屋の前で大人が舌を巻き
ロボットがやがてテレビを組むやるな
親雀まず軒下へ飛んで見せ
めったに聞かぬ声で頼みに来た男

下関市 原千里

小商い後生大事に老夫婦
味加減うまし世間に疎い妻
子供まで白い眼で見ることはない
湯上がりの顔を叩いて香をちらし

新居浜市 小林孝正

病窓に今日も椿がポトリ落ち
この子等が居て底辺に明日があり
失業保険あるので今日も遊んでる
食わざれば死ぬなり個性チト曲げる

新居浜市 安藤桂仙

多かりき我が人生の句読点
一合の酒で侘びしい羽づくろい

踏台の悲哀は隅で忘れられ
弔詞だけ聞けば案外良い男

今治市 越智一水

貧乏に生れてすぐに腹を立て
体育館みかんの村の寄附で建ち

海賊の島がみかん島となり

恋猫に根負けをする読書の灯

高知市 川竹松風

転勤へ酒屋も惜しい人でした

姿見へ舌出してみるも男の子

本人の意志とは違う手切金

ほっとした人も居るだろうご臨終

新居浜市 近藤凡生

アイウエオ知らぬ母だが僕の母

ささやかな誇り献血のバッジつけ

覆水のかえらぬ余生丸く生き

遠大な希望で見上るトンビの輪

堺市 高崎雄声

人間どこで終るか流れる水に似て

雨降ったことを理由に義理を欠き

交通戦の花形ダンブカー音をたて

用事ないのはいっち辛いよ宮仕え

大阪市 福井野迷路
茄子よ又処女美の艶で唆る気か
本当の笑顔がほかにもう一つ

ベトコンは追われジャプコンは威張る

通勤は押し屋に押され運ばれる

諫早市 川岡靈眼子

宝塚一句

浴衣着てなじまぬ土地の夕涼み

履歴書のページ数程働かず

愛して嫉いて怒らすのも無盾

一枚の舌では足りぬ世に活きる

児島市 伊丹阿喜良

父の死を想い出させるむし暑さ

ぐっすりと寝われましたと云うあくび

お使いの出来て得意な三輪車

雨蛙雨へ機嫌の声をはり

小松市 関戸宗太郎

どっちでもいいと高価な方を取り

東京へ栄転をしてまだ別居

大安は明治日曜日は昭和

偽りの教養駅で捨てて去り

笠岡市 松本忠三

兄さんと呼ばれいい気で酌を受け

大臣のウソにもあきて鍼を振り

ドレミハも分らずリズムに乗って居り

妻の髪染めて居るのに気がつかず

伊丹市 小川 静観堂

ご期待ばかりでチャンネルに迷い

いいかわるいか子等を買う美田

泡の味ごたごたならベビヤガーデン

鳥海山お花畑の裏は冬

竹原市 杉原 愛鳩

適当にはなれてアベックすがすがし

六畳一間へ掃除器まで持って

美人ふたり惜しや相合傘でゆく

欠航へ腰据えて飲む島の酒

兵庫県 河原 みのる

電話料ここに一円生きていた

箕面滝頼山陽詩碑一句

頼山陽靈酒にならぬほどの孝

箕面 野猿

立て札に曰くお猿に眼付けな

河川工事一句

この次は此処が崩れる仕かけにて

鳥取県 渡辺 乱坊

福引券付きのビールを無理に飲み

男なら飲んで見せろとコップ酒

上役が替りそれから重い口

本人よりおそく暑中見舞来る

青森県 木村 涼人

今日こそはやめる気で出る梯子酒

着て塗ってそれで男をうるさがり

きれいだと言われて怒るのも女

水着着一層はち切れそんな処女

香川県 三井 酔夢

わが胸に五百羅漢の住むある日

無神論たじたじさせる女客

おすすめに従いかねるリアリスト

しびれると云うビートルズ退屈し

大阪府 本庄 金三

天花紛で奇麗になつた児が欠伸

結局は意志の強さが金を貯め

風呂の外でママが待つてるバスタオル

正直に十円戻る赤電話

出雲市 原 独仙

病んでも恩給があり死んじや嫌

舗装せぬ市政なじらず水を撒く

ホームバー独酌もよし老妻は飯

堀江おしどり川柳家へ

川柳で夫婦喧嘩を大笑い

守口市 羽原静歩

スランプの心酒場の灯が招き

光陰は矢のよう金はいりて来ず

ジェット機の銀婚旅行であっけなし

お寝小してやいとで泣いた子がはたち

鳥取県 森田布堂

路郎先生へ遥拝

霊前に新らたな涙一周忌

ま汚職浅学菲才と言ったっけ

鶯を聞く夏山で海を恋う

あの星に月を足場に飛ぶつもり

大阪市 不二田一三夫

人生をのらりくらりと小金貯め

茶柱はこけたが稿料届く朝

嫁った子がみな幸福にありがとう

生き別れと死に別れがむすばれる

大阪市 西森花村

アドバルーン市場が出来た新開地

月末とテンポがあわぬマイペース

犬の居ぬ犬小屋の事子はふれず

鳥取市 河村日満

ストライキ家族会にも批判され

本降りへ予報に負けたベタル踏む

お使いへおんなじ生地値が上り

防府市 弘津柳慶

賞与もうだます気取る気拔目なし

方向音痴今来た道をまたもどり

通信費値上

値上に反抗し三十日に投函し

岡山県 大森句娯楽

注意札読めぬかと恥かかされる

真物を偽物と売らす術を覚え

伸びようとする盆栽の芽は摘まれ

熊本県 有働芳仙

スキヤンダル人気の落日盛り返し

海の見える丘は漁師の墓と風

それとなくさせる見合いの目が動き

笠岡市 木山遠二

日日好日持病を語る友が出来

日日好日あしたの事はあしたにし

つれづれに内職もして老夫婦

岡山県 田村藤波

人並に鐘も撞いとく安養寺

一円の儲けに軽いありがとう
皇太子より妃殿下に目が集い

大阪府 大坂形水

おうちおうち積木のおうち大阪城
だと云って丁稚にも行けず大学出
栄転にしても家族を置いたまま

大阪府 西 いわを

和讃唱えている間の善男善女
母と云う人が白い灰となり
公益社に習い親族最敬礼

下関市 桜川不水

冷奴へソを気にせぬ脂肪過多
洗濯機故障は女房心得て

老妻盲腸にて入院

動けないからだも花へ目が動き

小松市 馬場魚山

芋づるの遠き想い出家が建ち
押し分けて出れば一筆書の龍
もらわねばならず出さねばならぬ時期

高槻市 山田季賛

其日暮しの雀のんびり窓へ来る
砂利ドロの砂利も混ってビルが建ち
落書の子を賞めて落書き止めさせる

愛媛県 渡辺曉童

一人旅海の青さを青とせず
浪曲でなじみの宿場山や川
缶ビール売りに来るたびおごり合い

大阪府 室谷鉄舟

妻の風呂風呂も一緒に洗ってる
ええ話持って来たベル強く押す
ビートルズそれから床屋暇になり

大阪府 天正千梢

合掌をしても雑念かけめぐり
くのに母団地へ看護疲れが出
鳶が鷹生んだと姑上機嫌

奈良市 宮口笛生

えらいこっちゃえらいこっちゃ砂糖壺に蟻
ねむれない俤にアベック見て歩き
梅雨長く大きなめくじはいまわり

大阪市 今西章雅

台風へどうしようもない屋根瓦
出し抜けに来た友妻は辻散がり
自己判断手相に六十からの運

泉大津市 高津徹也

督促はこの次にする世辞に合い
口止めへ左のたもとあったかい

姿見へ女のおせる齡があり

富田林市 岩田みよ

うつぶんを叩きつけてる表書
浪花節人生があつて息がつけ
優等賞とられず努力賞ばかり

倉吉市 奥谷弘朗

脳脊髄膜炎で入院して

病室の窓から出勤バスが見え
弱点を知つて妻が味方する
氣休めに縁起かついで見るも年

大阪市 川口弘生

お隣りの増築で物干場を移し

算盤が役立とうとはと医者妻

慶沢園句会にて

紅い蓮路郎一周忌の微笑

大阪府 谷沢好祐

模造でもいいのあの人呉れたもの
冷静に返れば割ったことを悔い
人間は邪魔だ廻れと歩道橋

松江市 柳楽鶴丸

天皇ヒロヒトを外人だから書け

御馳走の一合の酒が仇になり

グロテスクなミミズク愛嬌のある瞳

大阪市 河井庸佑

年がいもなく人使いのへたな人
ぼろくそに言われてきょうも孫の守り
里帰りだきぐせつけて戻って来

岡山県 池田古心

腕の差は竿糸針餌同じでも
石ブーム畑の石垣くずされた
百円が釣るに千円かける釣り

姫路市 隠岐不醉

暑うても人並の息して御座る
乳牛も洋館に住む文化の代
元氣ならこそ御無沙汰と筆不精

枚方市 宮川珠笑

富士さんかそうかと車窓また眠り
読むために新幹線に乗る如し
榮進の望みさらさらず好日

京都府 西村句楽坊

わからない未来へわからぬ経をよみ
合同葬法華と念仏ミツクスし
禿だしてどうやら経にさびがつき

玉野市 小谷仙山

風呂帰り一句生れた遠花火
裸の子夕立が出て舞い戻り

食い逃げを両手でせまる蚊の命

兵庫県 大江 秋月

受話器持つ手がふるえてるいいニュース
左遷など気にせぬ俺には明日がある
蠅たたき持って夜勤の夜を寝る

大阪府 宮 地 双 楽

貝塚の謎も考古のメスが解き
五人子を育てて腕をソツとなで
引導の鐘もつきたい年となり

熊本市 楠 田 英 子

まゆじわをよせ灰皿へねじりつけ
ゆつくりテレビ見てそそくさと勉強し
損をしたビラでお店は増築し

鳥取市 藤 本 礎 山

愛朽ちた姿を家裁へさらけ出し
宣伝を内緒ヨと云う手もあった
故郷からはるばる寄附を取りに来る

泉佐野市 大 工 睦 夫

お日様を追うひまわりに西の風
交通禍恐れて居ては喰て行けず
ハイキングコースにむごいハイウェイ

三次市 和 泉 松 風

田舎道都会の夏が歩いて来

雨の街柳じっくり首をたれ
床の間のコケシが今日もにっこりし

京都市 都 倉 求 女

灯を消してせめても風を冷やした気
さわやかに梅雨が青すだれの向う

加賀市 細 呂 木 魯 木

愛情と仕事で妻を迷わせる
どこことなく養子らしさはにじみ出る

大阪市 賀 本 昇

プロポーズ予約済みよと断われ
アルサロのムードに弱い律義者

美弥市 安 平 次 弘 道

学校を早退してまで塾へ行き
せめて子供だけはが受験地獄にする

大阪市 森 本 良 夫

親の理を不合理にする子の若さ
ビル工事魔物に見せて夕陽落つ

★

中 島 生 々 庵

老骸の自画像眠むられぬ夜を狂い

余命十年三千六百五十日

砂漠に陽が落ちやっとなつた夫婦愛

終点近し一本の吊革に老夫妻
と照覧あれとは虫のいい話

阿茶さんへ祝吟

古稀と聞くされど色香はまだ失せず
鈴鳴りになってはしやぐ保母の腕
生活のかかった腕をいたわれ
横断歩道でれくさそうに手をあげて
手をあげて轢かれ仏も浮かばれず

松江梅里

残暑には残暑の味のありビール
静注したい腕吊皮へぶら下がり
くたびれて帰れば野球のテレビ待ち
バッテリーセンターテレビで見チラシで見
遠来の客は仏間へ寝てもらい

西尾 榮

清水白柳

露天風呂月見草は手のとどくところ
露天風呂一葉浮かべているぬるさ
炉辺話一匹狼もあり駐在もあり
出湯はめて今度は家族でくるといふ
日本ライン盃洗にして酌みかわし

若本多久志

雷にねらわれても巨人動せず
老夫婦みんな無くして蔵に住み
女の意地は汚職など気にとめず
盃をコップに替える目がすわり
高垣和歌山市長を悼む

川村好郎

辞世めく句ばかり俺も齢かいな
五ツ玉から四ツ玉になり社は栄え
うちの娘はうちの娘がと縁遠し
我が道を行く気になって古稀近し
人生の周遊券終りが近うなり

菊沢小松園

冬越して来たのに金魚さりげなく
二号の倅せ旦那より先に逝き
次は本堂何に貸そうかと寺
四十のあせり化粧品また変り
安いとてバナナおかずにもならず

北川春巢

風情を睨み返した精薄児
先代に後ろ姿も似て養子
学校を出て親の死角を突いて来る
疑えばうたがう節のあるそぶり
人間に飽いて暑さの宵を寝る

秀句鑑賞

：前月号から：

英語でしゃべり日本風に笑い

(清生)

この頃は、日本人も外国語が達者になって
椎名外相などもにこやかに、愛きようをふり
撒いている写真をみかけるが、どうも笑いか
たは、うまくないようだ。半分しか、笑わな
いのである。そこへいくと、ラスクさんなぞ
のわらいかたは、ほんものである。肩も、脇
も、笑つてゐるのである。あだかも名優のよう
に。つまりこれは教養の差だ。

この句は、仲々の皮肉をとばしていること
が解かる。うっかりすると見逃がす句だ。

女心を心得ている薄情さ

(きさ子)

猫好きな女の人に

「猫って薄情でしょう」と云うと。

「ええ薄情よ。そこがいいんじゃない」
とおっしゃる。

後藤梅志

薄情であることを知って、男に情を尽く
すのは、これは女の道楽であらう。しかしそ
の女心というものを、ちゃんと知っていて、
情をつくさず性わるな男性は、じつは女にと
って、ちよつとした英雄なのである。
この賢明な作者の、こころの底に動いてい
るものは、果してどんなものであらうか。

死ねば行くところ一坪買い求め

(甲吉)

すらすらと読んで仲々味のある句である。

この句の場合「一坪買い求め」は、急所であ
るが、これを3平方メートルでは、句にも
何にもならないのである。国民にこんな無理
なもの強いる、画一化の好きな役人には、
正々堂々と、画一化反対をさげふ自由はない
ものだろうか。

この句を見てしみじみ思ったのだが、人権
というものを、そろそろ発動したいものだ。

ぎりぎりのくらしお産の金を借り

(愛鳩)

この句は、相当深刻なことを云つていなが
ら、余り深刻に感じられないのは、「お産の
金を借り」が利いているからであらう。
こんなのが、ほんとのユーモアというもの
かもしれない。推称に価する句だ。

土佐犬の元横綱は飼いころし

(二三夫)

高知へ旅して、と添え書きしてあるが、な
るほど、土佐の本場へ行かなければ、出ない
句だ。

食へ物の豊富な土佐でさえも、土佐犬の横
綱となれば飼い方はむづかしからう。牛肉一
貫目ぐらゐは毎日ペロリ。散歩は二人掛け
この横綱は、廃業しても元横綱の貫録だけは
保持せねば、土佐人の顔が立たん。

土佐人の胆つ玉にも、大いに感心させられ
たが、この句もなかなか面白い。

うつりゆく四季起き伏しを舞う扇

(潮花)

踊りというものは、前もって歌詞を知つて
いるか、筋書きを知るかしなければ、情が移
つて来ないものだ。しかし扇子一つを手頼り
に、四季のうつり変りの中へ起き伏して、
娘から老母になつて行くさまを演ずるのは、
大変な修業がいる。芸道のことは分らない
訳ではないだけに、共感をかんじる。

この句は、作者が「四季の山姥」か「千代

の友鶴」を舞った時の、実感句と思われる。なんとなく、哀愁をたたえた句である。

お客さんも流れ作業で持てなされ

(いわを)

この頃の世の中の、移り変りの激しいのもおどろく。例えば、洋服を一着デパートで注文するにも、寸法、仮縫い、注文書の作成と、みな係り員がちがひ。そのたびにボックスへ足を運ぶ。眼鏡一つ買うにも、何人かの店員が、流れ作業式についてまわる。何のことはない。お客さんがデパートの機構の中へ都合よく配置されて行くようなものだ。

お客さんは、ポカンとしている時の方がおおいのだ。又反対に、能りつをあげる方面もありそうに思えるが、かくして人間がキカイ化し、高度化して行くのはまぬかれぬ。

ぼろ口へ石橋叩くのを忘れ

(静馬)

ちよっと見ると、句会吟のようにも思えるが、なかなか面白い句だ。

用心ぶかいくせに、ことボロくちとなるともう一つの思案を忘れてとびつく。定年となり、相当の退職金をもって人々が、イカサマ金融に、簡単にひっつかかるものだ。

「石橋叩くのを忘れ」が、ユーモア味をそえてこの句を生かしているのが解かる。

足腰をきたえきたえて癌で死に

(阿茶)

「足腰をきたえきたえて」がおもしろい。人の命数ほどはかり知れないものはないくて、今日に、明日に、ピンピンしている人が、死んで行く。達者になるには、足腰をきたえるのが肝心だと、朝に晩に、きたえきたえて来たものが、やっぱりあの人にもガンだったのかと。すこしも神々はカシヤクしない。

さすがにこの句は、お医者さまだけあって急所を衝いている感じである。

叱られている児の方にある理屈

(旅風)

その理屈はなんであるか知らないが、叱られて、チヨコナンと坐って、目をかがやかし、ている子供の姿が目に見えてはほえましい。終戦からこつち、すっかり時代がかわって来て、同情されているのは、われわれ老人組の方であるが、まだまだ、子どもには、子どもの世界があつていい。本当の話。「こどものくに」という童話雑誌のあつたころ。鈴木三重吉が絵本を書いていた時分の子供は、おとなしかったが、どこか生き生きしていた。もっともつと、おとなは、子供の味方になつてやるべきだ。

いざとゆう時には自分一人なり

(蘭幸)

本当の味方は、自分一人だ。こんな感じを味った人は、本当の不幸に出会つた人だ。誰れだつて味方が、自分一人だけだ。なぜ

とおもう者は一人も居ない。実際は味方はたくさんいるのだが、命までもという人はないのだ。悲しいが仕方がない。そう思うことだ。この句が思い当るようなことの、無いことを祈る外はない。

半分は笑った顔で叱られる

(玲人)

この作者には、いつも近作柳樽でお目にかかるが、句は、いつも川柳塔の上部を占める句だ。句柄がすこし淋しいが、ユーモア味と云い、作句意欲と云い、おとろえていない。この句は、なにか思いがけず、叱られたところらしいが、あわてるともなく、とりつくりうともなく、自然に戸惑つたさが見えて、情景が、おもむろにおかしくなる。ここいらが、作句の腕であらう。

燃えつきる時を知ったか灯の真紅

(紫)

残燭が、まさに燃えつきんとして、パツと一時あかるくなる。ごく当り前のことを。この句は云つてゐる。それでいて、何か迫真力を感じさせるものが、この句にはある。擬人法的の表現が、読む人のところにあるものにふれて、ピッタリとした呼吸が生れたものであらう。

句材は古くとも、少しも意とするに当らない。作句心が清新であればそれでよい。もあり「近作柳樽」へ投句してほしいものだ。

川俣柳 初篇研究

(三十九)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 故 高須啞三味

清 博美丸 十府

藤井和雄 岡田 甫

417 嶋中の女が新さんく

五雷

川端||絵島・生島のことか。江戸山村屋の俳優、生島新五郎の話で大奥はもちきりだの意か。

高須||もちろん生島新五郎。絵島の方は信州高遠へお預けですんだが、生島は遠島となった。「生島が行ったは鬼界近所なり」(籠三22)「生島へ草履を二三十直し」(安八義5)。

前田||賛。句は言葉だけに終っている。

清||主題句の作句態度には女護島の連想を含んでいるだろう。

丸・岡田||諸説賛。

418 剃刀をあてると寝て、かぶりふる

菅江

川端||起きている時は嫌がつて逃げ廻るので、寝ている時剃ってやろうとすると安眠を妨害されるので、無意識のうちに頭を

ふる子供の描写句。

高須||「かぶりふる」が「いやいや」の表現なのが面白い。

岡崎||「やっと寝かしたと剃刀を借りてゆき」(二八3)「夫婦しめやかに月代めすんでる」(二三14)

丸・岡田||賛。

419 人參の鋏した、か後家ハもち

車弓

川端||「人參」は最高貴の漢方医薬であり、また補精剤ともされ、これを好む者を多淫だという俗諺もあった「鋏」は「鉛」だが「人參の鉛」とは、毎月朔日に服用しておけばその月中は受胎しないという避妊薬で、浮気後家に重宝がられた朔日丸のことであろう。句意は、浮気後家が朔日丸をこたま買ひ込んでいるだろうとの意。

高須||「金ヘンに公」などという文字はない。「鉛」のアテ字かとの川端説だが、

柳雨翁は「鋏」の誤りで「亭主の呑み残り」かといっている。三面子先生は「あまり」というのを筆耕が誤読して「ナマリ」のつもりでこんな字を書いたのだろうと説いている。いずれにしろ古川柳解釈には、こんな迷路もあるという一つの証拠を示している句といえて面白い。

前田||当時の人參を配合した売薬では「人參三藏円」が有名である。人參は朝鮮から来たものが既に干してありかちかちになつており、川端説の「鉛」形であった。しかし鉛形ではあるが朔日丸のように避妊薬(むしろ墮胎薬)には使っていない。矢張り強水剤であった。なお「朔日丸」には人參が配合してなかったことは勿論である。従つて「したたか」という用語から考えて三面子氏の「あまり」即ち亭主のみ残りの人參をもっている説が正しいと思う。達者な後家の句。

岡崎「あまりしたたか」でも一応スジが通っているが「諸橋大漢和」にも見えるように金篇に公はウソ字でなく、鉛と同字である。したがって、この人參、ただの朝鮮人參でないことは「近世庶民文化」73号で岡田甫先生が治定していられる。その説を要約すると、日本へ輸出する朝鮮人參に「甚シキハ鉛鉄ヲ以テ納レ其ノ斥量ヲ重クスル」というような粗悪品があり、薬用人參を裂いて鉛片を押し込み目方の水増しをはかったらしい。この鉛入りの人參をつかまされた亭主が死んだあとには、遺産ならざる人參の鉛がどっさり残ったという後家の悲喜劇を諷刺している。

清「この句解は「庶民文化」の岡田先生の解をそのまま写せばいいわけです。

藤井「岡崎さんの記憶力に敬服。

丸「岡田先生によって始めて明解を得た句、感謝にたえず。

高須「『諸橋大漢和』でなくても、手許にあった芳賀剛太郎先生の「大漢和」にもあった。

420 らんとうの脇で釣てゝしかられる

一 甫

川端「不詳。「らんとう」が解らない。千垢離の脇で釣をしていて叱られたのかとも思うがすつきりしない。

高須「『らんとう』は「卵塔」で、正し

くは「禪僧の墓」だというのが、俗に墓の事だから、墓の傍で釣をしていた、即ち殺生禁断の場所で殺生なことをしていて叱られた。叱ったのは坊主か？柳雨翁は「場所が限定できるはず」と云っているが、自分では思い出せなかったらしい。

岡崎「少し不安だが、高須説賛。

清「場所の限定必ずしも必要あるまい。

丸「高須説賛。場所を限定しないと全くつまらぬ句となる。その場所だが、落語のおしの真似をして魚を釣る話は不忍の池のようだが――未調。

岡田「高須説賛。必ずしも場所の限定は必要はないが、江戸で海か川のそばの寺は？と考えると、ちょっと思い浮かばず。或いは寺の境内の池と考えられぬこともないがそれでは「卵塔のわき」の供述が生きてこない。場所はさして考慮せずとも高須説で十分であろう。

421 気の多き医者に成てと困ひやき 水砥

川端「困い女だけでは満足出来ず、医者に変装して遊びに出ようとする旦那（もちろん坊主）を、自分も立場もわきまえず、浮気者やいているの意。

高須「『困い』といえは坊主の妾。その妾が、医者姿で女郎買ひに行く坊主に「やきもち」をやいている。

清「この生臭坊主は妾を困っている上に

吉原通いもする。「法衣より羽織へ銭をかけるなり」（傍五21）と、医者になる姿も立派であろう。

丸「賛。「気の多き医者に成て」は困いの口吻であるが「有るかいはござりやせんと女房やき」（一〇18）の卒直さに通かに及ぶ。

岡田「諸説につきる。（但し、大たい遊里近くの茶屋などで、脇差を一本借りて差し医者めかすのが通例）

422 せんごりに十九人と八気にかゝり

五 連

川端「千垢離」は、川水につかって、神仏へ祈願の為身を清めることで、十九人は若い娘の病魔退散の祈願。娘の病氣は旁咳である。女の大厄が十九才であるから十九人という人数も氣になる。

高須「一生懸命に祈願しているのは父親か？ちやうど同じ祈願者が十九人いたとは氣がかりで、縁起が悪いと思った事だろう。

清「賛。「千垢離も二十人のが一人欠け」（安九信3）という句もある。

丸「賛。但し千垢離をとっているのは父親ではなく親類知人で、その数が十九人。娘の病状が悪化したのである。

岡田「同。江戸では両国橋の向う岸のそばに垢離場があった。

私の先輩と後輩

若柳潮花

私をして川維の門を叩かせた先輩、その人は正本水客君と黒川紫香君であった。その頃までは先生なしの、俳句、短歌、詩、など云うものを各自作り、色々な誌名の同人誌を出すことで文学青年としての誇りらしきものを持っていたが、私が川維へ入るのを最後に川柳一本に踏み切ることになった。

しかし其の頃には、すでに川維においては水客君は二年先輩であり、紫香君は一年先輩である。私が近作柳壇の一句陣に初めて入選した句に

売られゆく西瓜車の座をころげ

潮花

こんな句しか作れなかったのに両君は、

握りしめればかそけき砂の反抗よ

水客

戸を開ける音さえ違ふ長女次女

紫香

などの句を見せて、私をいらいさせたまものであった。其の後三人揃って水客君を先頭に不朽洞会員に路郎先生の御すいせんで入った頃から、三人の川柳への情熱は燃えに燃えた

と言ってもいいと思える。其の当時の川維不

朽洞会員、番傘同人と言え、川柳を作る者に取って、最高の榮譽とされていたからである。無論路郎先生が常に私に「生命ある句を作れ、自分にしか作ることの出来ない、個性の句を作れ」と言われていたが、そうした句を作ることには程遠いものであったが、川柳界の爲にも、自分に続く後輩を育て上げてゆくと言うことにも、当時は、自分なりの努力をしていたし、私達に川柳のある限り、そこには、水客君が居た、紫香君が居た、両君が居たことに依って、私の川柳も多少は伸びてゆく事が出来たと考えられる。水客君は、その名の如くどことなくすっきりとした句がある、着想も、表現もとてもうまい、そして常に私達に清潔な時として女嫌いのような感じさえ与えて呉れる水客君の句にも

くちづけで不安な言葉ふさいどく

水客

と云った句があるのも見逃せないと思う。紫

香君には温い家庭的な句が多く、また水客君のように旅の句もある。特に虫の句などは、面白い表現でうまく捕えていた。

紫香

豆の花欄出る牛の鼻をなせ

なぞの句がある。ともかく両君は、私がすべてにおいて尊敬し得る先輩だと思っている。また後輩としてもいい作家が居た。それは真鍋一瓢君である。私は彼の、どこことなく軽い笑を誘われるような句風が好きだった。

信号は青だそれ行け子沢山

一瓢

嫌いな隣だが風除けの位置にあり

一瓢

なぞの句も一瓢君らしい句である。なお吞水光輪、月都、などと云う後輩もいる。女流では池上知恵美さん、沢田美喜、末沢花美さんなどを数えあげることが出来る。しかし此等の後輩は、退職、栄転、結婚、斗病、死亡などに依って作句を中絶していられる方が多い。籍だけを置いて不在地主と云うことである。作家は不在地主であってはいけないと思う。少しずつでも作句出来るように心掛けて欲しい。そうしたことは私の先輩にも言えると思う。

私は川柳塔誌の七月号で斗病を続けていられ永い間作句をされていなかった、板東若芽さんの句を近作で見ることが出来た。それは私に取って何よりも嬉しいことである。こうして、わずかずつでも柳誌の中に私の後輩の

句を見られるようになることを願っている。それ等の柳人の再起の時こそ、本当の川柳人になる時だとも考えている。此の度、知恵美さんの一周忌に当り、娘さん達の手に依って母の句集「折鶴」が出されたことを機会に、遺児の松山市、西川みやこさんが川柳塔社を舞台に作句を始められたことを何よりと思

川柳は人間である

浜田久米雄

う。通信指導という不便は有っても、私としては立派な後輩に仕上げたいと考えている。最後に後輩の句を拾って一日も早い立ち上りを願うことにする。

麦をまく夫婦が霧にへだてられ
男男男己が知性に酔う如し
袈裟拝領しが十誠守りかね
知恵美 月都 光輪

木履おりいまではなつかしい川雑大鉄局支部畔柳社という会ができていたからである。それまでは川柳の川の字も知らぬ私であったがすすめられるままに月の例会に出て見たのがわが生涯に川柳という趣味を永続させた例会であったから不思議である。

元来私は野球とかテニスとかの動的趣味、いわゆる体を動かす趣味よりも本を読んだり随筆のようなものや詩を作る方の静的趣味の方が身に合っていた個性を持っていた。いまでもそうであるが動的趣味の方はわかりにくい言葉や動作が多くて昔のままの気性で過ぎ

て来ていると思う。大鉄局支部に入会して故福田山雨楼先生、故西田紳策先生の教えを受けてなる程川柳はおもしろいものだ。もっと早くこんないいものがあるのを知っておればよかったとしみじみ感じたのであった。ある時醍醐寺へ吟行をした時兼題の「姿」で私の句、

倫落の姿に残る空笑い

というのが山雨楼先生選の天位に抜けたことがある。その頃から句も抜け出すし句会のおんい気にも浸ることができ数々の思い出を残し昭和十一年夏大鉄局開設と同時に広島へ赴任した。ちょうど故九天といっしょであったので相図って川雑大鉄局支部を創設、一時は義士ならぬ四十七名の会員時代もあった。それから十九年に故郷岡山に帰り各地で川雑の支部を作りながら、ひたむきに川柳への情熱を燃やしたのであった。昭和三十八年文化の日を期して柳歴三十年を記念して句集「凡人」の発刊を計画、故路郎師にご相談申し上げてご快諾を得序文から印刷、校正すべて先生にお願いして限定句集が出来上った時の感激は一生忘れることはできない。この句集の題名「凡人」は

凡人へもったいなく湯があふれ 久米雄
からとったのであるが全巻を通じて百句をのせた。というのはせめて句集は出すからには

百句位はのせなければならぬと思つたからで一頁に一句それに句の思ひ出注釈を細字で付加したのであった。その百句を選び出すのには私は苦勞した。昭和八年から作り初めた私の句で発表になったものは全部年別に記録して約一万句あまりあつたのであるが、この中でこれが久米雄の句でございます。どうぞご覧下さいと人前に出せるのがまあ十句無理をして二十句であつたであらうか。その上に又無理をして八十句をプラスし、やっと百句にこぎつけた路郎先生にお願いしたわけである。

先生はいつも「いのちある句を創れ」とわれらを励まして下さつたが自信をもつて人前に示せる句が三十年かかつてやっと十句程度

とはまことに情ない次第である。その十句にしてもなんだこれが久米雄の自信句かと言われる句があるかもしれないがせめて十句位は人前で見てもらへる句であると思う。

いのちある句を創ることは安易ではない。むしろ苦難の道である。けれどもたまに会心の作が飛び出したりすると、やはり川柳はやつていてよかつたとしみじみ思うのである。それから川柳は句を作るだけのものではないこと、川柳を通じて川柳人同志の魂の交換がたえず行なわれていること。極言すれば川柳は人間味である。そして、川柳は人間であるといふことである。川柳をつづけている私にとってあるいは川柳は川柳人のみが知る宗教であるといつても過言ではあるまい。

川柳初心のころ

長野文庫

私は大正十五年の秋から古本屋をやつていたので、商売柄時々川柳書や川柳の雑誌を取扱つたこともあり、その都度パラパラとめくつて見て書中の何句かを讀んだことがあるが

川柳に余り関心が無かつた。ある時も番傘誌を一冊十錢位で数冊買ったことがあつたが、當時は横とじの小型なもので内容よりも表紙の浮世絵の図柄の方に興味を感じた位であ

る。何しろ田舎の古本屋のことだから資本も兼ねていたが資本の中に村上浪六の本が沢山あり、その中の「うき世のうら表」という本には川柳が沢山載つていて面白く讀んだ記憶もある。

渡辺曉童との出会い

昭和七年ごろ時々店へ来ていた客の渡辺と云う青年が曉童と云う名で川柳を作っていること、仲間も四五人居ることを知つた。そして奨められて、慢然と作句をはじめたのである。これが私の川柳趣味のきっかけであり、川柳雑誌へのつながりの初めでもある。當時句会風の集りも不定期に開かれていたが、余り出席せず、もっぱら課題を作つて投句を主としていた。同好の仲間も訪ねて来るようになったが何れも二十才前後で、新加入の私が二十七才で一番年長であつた関係か、あるいは新人を手離すまいとする魂胆からか、不思議に私の投句をよく採ってくれた。その頃は未だ発表誌もないので市内で発行されていた商工新聞と云う旬刊紙などに発表していた。句は勿論拙なく、例えば「そろばん」の題には

そろばんは下手筆算で手間がとれ
酔つていてそろばんの桁また違い

「机」と云う題には

腕角力机の上のものをのけ
金言を机の上に書いておき

という風なものを盛んに作つて喜んでいたものである。

川柳雑誌との関係

たしか昭和八年の秋だと思うが、仲間の宵明の勤務先である銀行の二階で句会が催された。名称は川柳大会だが集ったのは十四五名だったと思う。この時松山から酒井大庵、新海素泉の両氏が来られて選句をしたが、課題の中の「妻」と云う題で、私の

よい妻と云われる妻にあき足らず

の句が大庵選で天位になり、賞品として先生の短冊

米を食う日本人なら燃ゆ血潮

を頂いた。大庵先生は大そう勇ましい方で

初日の出拜んで君の恩国の恩

覚めよ醒めよ救世主ここに在り

歎喜歎喜感謝の中へ初詣

こうした句風の方である。その後しばしばお

会いたが「文庫君、少し字を稽古せいよ」

などと私の愚筆に注意して下さったこともあ

った。この大会時分から漸く川柳の面白さが

分りかけ本格的に川柳作句をはじめると共に

川柳雑誌を講読し、川柳書などで勉強をし傍

ら前田伍健師の添削もつけたのである。その

内に川柳支部を結成し前記曉童が支部長にな

って今治の川柳界は川柳一色に塗りつぶされ

た。その後は大分様子が変っているが、無論

私も支部の一員として現在の川柳塔の今日まで続いているのである。川柳雑誌に取り上げられた句では

地の大慈大悲毒草にも及び

人も国も垣をするのが好きらしい

損だとは知って刃向うへそ曲り

怪しからん事実正直者が負け

尾があれば無論尾をふる小あきんど

など皮肉味が多い句が好きである。

雅号のこと

あの人この人

(五氏にご執筆をたのんだが、三氏より原稿がこなかった。例によってピンチヒッターに狩り出されるハメになった)

さて、先輩となると多すぎて動きがとれなくなるが「大萬川柳」をやりにかけたときは、常勝梅里さんと名手潮花さんを目標にしたから、この人たちがよき先輩となるわけである。だが、ぼくが川柳なるものをはじめて書

川柳をはじめた頃、本名の軍四郎に因んで「史郎」と名乗っていたが、史郎も史朗もあり、その他紫浪、紫朗、志郎などもあるときいて「文庫」と改めた。当時商号が東洋文庫であって近所の人も「文庫さん」と云う呼び方をしていたので、それを雅号としたのである、戦後文庫本が流行し、文庫と云うのは小型本の代名詞になった関係から駄が小柄だから「文庫」と云うように思われているが、本当は店の屋号から来ているのである。

不二田 一三夫

いたのは昭和七年で、そのときにおぼえた雅号の方が今だに活躍されているのである。ある意味ではこの方が多くの川柳の先輩になるのではない。

「講談倶楽部」十一月号(昭和七年)に発表された川柳がある。選者は阪井久良岐先生で、題は「満蒙」「帝展」「映画」というのだった。映画という題ならばくにも作れそうにおもったので応募したわけである。一等に

入選すれば五十円くれるというのが魅力だった。当時の五十円は親子三、四人の一月の生活費なのだから、遊ぶ金にこまっているばかりにはスイエンものだったのだ。

フタをあけてみると佳作で、あさはかな夢はもうくもくずれたが、同じ佳作の中に、三条東洋鬼という人の名があった。こまで書けば、この方がどなたであるかはもうおわかりだろうが、今はときめく「時の川柳」の御大、三条東洋樹先生であることはいうまでもない。「路郎忌川柳大会」で東洋樹先生にお会いしたとき、このことを申しあげたら、ゼンゼン記憶がないとおっしゃった。

東洋樹先生と多くの句を紹介する。

満洲の赤い夕陽へ歎をとり
紙芝居井士のなれのはてがやり

三条東洋鬼

不二田一三
そのころから川柳をつづけておれば、よくもすこしはい力オになっていたかも知れないが、それっきりでやめてしまった。

路郎賞発表

本社十月（九日）創立一周年記念句会で

本誌発表の「川柳塔同人作品」40年10月号から41年9月号までを本社雑誌選者に白柳氏が加わり、慎重厳選、ここに栄光の一句を世におくります。

8選者が各10句宛もちより、九月三日の理事会でこれをきめます。

「会場は千日前自安寺、当日は午後三時から同人総会、六時から記念句会を開催」

故路郎先生もそのころ「講談倶楽部」の選者だったそうで、多くのこの話をきかれ、「ぼくの選へずうと応募してくれていたらきみをはなさなかったかも知れない」と、冗談まじりに云われたことがあった。

×

後輩という、長女のムコ、河井庸佑ぐらいのものである。

三人の娘はみな嫁にいったが川柳はやらなかった。三人のムコのうち川柳をやっているのは庸佑だけである。彼は、ぼくのやることは、なんでもついていた。長女が、オヤジに負けるなとケシかけているようである。彼は師範出のおとなしい教育家だが、長女はぼくに似て鼻っ柱の強いヤツで、とにかくオヤジをたたけというのにあるらしい。彼は新聞社お抱えのコント集団や、標語研究のグループにもついていた。ぼくもそうだが、彼も別に川柳をうまく作ろうと努力もしないし、選をする勉強もしない、同人になっ

て十年近くになるのだが、黙々と句会を手伝い清記をしてきている実にいい男である。「お父ちゃんの仕事を手伝え、一度、ノ」といったら二度とさせてくれないのよ」

と、娘はハッパをかけたそう。川柳時代から句会の清記をあす取りに行くと言え、彼は寒中でも徹夜して、編集に協力してくれているのである。白柳さんに云わせると「わるいオヤジさんをもったね」である。

彼には職業柄、学校関係の句が多い。路郎先生の「新川柳鑑賞」にも一句はいつているが「川柳塔」になってからも、後藤梅志氏の「秀句鑑賞」に

運動会わが子ばかりを追うカメラ

庸佑

というのがある。これは彼がパパとして、わが子の運動会に8ミリで追いまわしていたのを見たことがある。

ちょっと後輩をほめすぎたかな。だが、どうせ本社句会の清記などで苦しめるのだからまあ、これくらいならかまわんだろう。

先生と英語

吉田 水車

路郎先生を名古屋にお迎えしたのは川維名古屋支部創立句会の時と戦後全国川柳大会にご出席のためお出の時の二回であった。その

折一夜を拙宅に泊っていたので、翌日信州へ向われる先生を名古屋駅にお見送り申し上げた。

久しぶりの先生をお迎え申しても、まだ諸事不自由な時とて思うような、もてなしも出来なかったが、終始にこやかに過され、やがて寝に就かれた。先生は二階に私共は下にいる。夜も大分ふけて、もはやおやすみだろうと思う折ふし、何か朗々とうたわれているよ

うなお声が聞こえた。翌朝そのことを先生におたずねしたら

「君あれは英語の本を復習していたのだヨ」これからは絶対英語の必要な時機になるのだからア、と訓すように申された。ただそれだけのことは申せ、事実今日日本の国際的立場をおもう時、先生のご先見と用意の周到には深い感銘と共に追憶のよすがとする。

近 詠

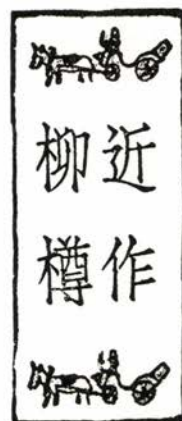
麻生 葭乃

青嵐部屋つきぬける二階に居
夾竹桃蟬が強調する暑さ
ひと雨が欲しい生駒の蟬さわぐ
一丁の散歩に浴衣とりかえる
坂急になって散歩はひきかえし
ちちろ鳴く秋を待つ酒うまくなりゆく秋を



ココロ
便箋





松江梅里選

倉敷市 水 粉 千 翁

盃を受けて団扇を持ち直し
うつぶんを軸に波紋を描いている
戻り船待つ身へくねる波頭
晴耕雨読よし継ぎはぎの余生でも

出雲市 王 紫

決断の場所は星降るバルコニー
栄光の座にも孤独は従いて行き
冗談にした本心を見透かされ
さわやかな余韻残こして去つた人

大阪市 小 東 琴 女

四海波静かに初夜は眠られず
上衣着せかけまた逢える日を約し
本能がまだ赤線の灯を消さず

羽曳野市 谷 垣 史 好

ズバズバと云うて女に好かれてる

目を閉じて女窮鳥という風情

からませた小指へ熱い血が流れ

七尾市 松 高 秀 峰

催促のない借金が男にし

蚊を叩き叩いて女立話

子は妻の味方になつてまるくゆき

大阪市 小 谷 葉 子

童安寺で

雨の石庭蝶も二人に負けず濡れ

二次会を逃げて待たせたところで逢い

呼鈴へ も一度鏡のぞいて出

高知市 永 野 舞 子

空の青一人じやおしい海しずか

くちびるを許したまでを星は知り

無愛想な車掌よりましワンマンカー

大阪市 吾 郷 玲 人

海開き山開き梅雨は真つ盛り
売春婦需要にに応じていると云う
紅涙を絞れなかつたリバイバル

玉島市 井上旭峯

自惚れのない人間という孤独
口止めは二度目の肩を強く打ち
口下手の熱意に心動かされ

大洲市 堀内曉風

胃袋の太さ不思議な酒の量
花形となつて外遊箔をつけ
子の無慾慾があればと親の慾

大阪市 江城功雄

束の間の晴れ間を蟻は今日を生き
ダイヤルを廻し残して迷う恋
無為徒食ある日蜘蛛の巣を見上げ

小野田市 西畑霞

みんな居る前で薬を吞まされる
孫帰る頃はテレビの忍者もの

松山市 西川みやこ

ステレオのポリウムあげている不満
つまみ喰いみとめ奥さんよく太り

和歌山市 秋月宏方

離婚者の種切れもせず週刊誌
百万位持つて買いたい宝石部

堺市 斎藤亜也

クラーに恐わごわ座る里の母
シヨツクシヨツクなんでもシヨツクにしてしまい

大阪府 河本雪男

ある時の憎悪に似たるバラの赤
究極のところで理性捨て切れず

下関市 志賀木石

負け惜しみ言わず負けん気出し給え
思うからこそその叱言と恩に着せ

下関市 志賀汀花

寮の灯に男馴れない針を持ち
衰えしことにはふれず母を採む

竜野市 森下峰子

キヤツチした螢を意地になつて追
取りまきが人氣を煽るスターの座

大阪市 島田雄峯

影法師すねた私に付いてくる
気がつけばすでに四十と云うあせり

高知市 田内文子

持ち物で生活の違う女と知り

まだ許すまでにいかない恋で居る

和歌山県 山 本 泣 笑

この田だけ残してくれと泣く蛙
産む数は心得てますと娘は嫁ぎ

笠岡市 谷 本 鈍 愚 坊

連発のデスネに要件はかどらず

記念樹になつた事故の日植えたグミ

愛知県 横 紫 光

困つたら来いでも来られても困り

不渡りと見えぬサインがうますぎる

米子市 八 木 千 代

いつちよく叱つてくれた師を憶う

湯に透ける肌は四十を忘れさせ

西宮市 前 田 芙 己 代

よろめきのスリルがうけてベストテン

愛情を切売りしても女生き

島根県 小 砂 白 汀

情性にはあらず確かと今日を生き

流行を追う女露出症となり

奈良市 村 上 春 己

切腹のように満腹腹をなげ

角折れた鹿のあわれを子が話し

羽曳野市 杉 本 白 扇

太いのが来てつり革の腕を引き

鍵かけてから窓からものぞいとき

河内長野市 森 本 黒 天 子

安定所職より金が欲しい顔

いたずらをさせ診察の順を待ち

倉敷市 水 谷 谷 水

自費で飲む醍醐味税吏にや分るまい

ひたいのすじヒューマニズムの限界か

大阪市 和 田 痴 亭

鬼手仏心鼻に芯つめ隆鼻術

母親は愚鈍にみえて孝行し

桜井市 岩 本 雀 踊 子

角がとれたと年寄にする気かい

鏡台に笑つてもみ おこつてもみる女

善通寺市 岩 田 太 一

写真ふと地獄の絵図のトルコ風呂

不快指数女見る目もうつろなり

高知県 山 川 勝 子

娘の夢は髪を切つたり伸したり

ろくに口きけぬ子あほうだけおぼえ

大阪市 西 本 保 夫

看護婦のうたい文句はお大事に
うすべつたく乗つた女患の寝台車

普通寺市 伊 藤 歌 子

雑草の生命力にあきればて

雨蛙我世の春を詠歌する

北九州市 三 上 春 雄

愛媛県 関 本 柳 剛

適令期雨には雨の色を着る

真実をゆがめ週刊誌のいけず

広島県 南 条 露 声

広島市 上 代 美 文

ビールズ程の人氣が欲しい票

席ゆずるところかテストに夢中です

岡山県 瀬 戸 山 文 平

ア・ラ・モードいつそ裸にしてしまえ

露出過多両成敗の痴漢沙汰

島根県 堀 江 正 朗

青森県 岩 淵 一 星

研修は女をだます手もおぼえ

残飯へ感謝をしてる豚の鼻

水蓮の咲く飛石へ手をひかれ
おはなさんそつくりお人好しの妻

八幡浜市 平 田 砂 生

改札をななめに抜けた借り衣装

大吉が出るまで引いてみたみくじ

みんな勤めて弁当が四つ
停年制どこふく風とベタル踏む

大阪市 半 田 夏 生

やつと見たピフエの窓にうつる富士

年甲斐もなく混浴の血が騒ぐ

笠岡市 木 山 要 次

スモツグは大内山を避けられず

出雲市 山 本 朱 紅

何不足ないがムードのほしい妻

はち切れる胸に制服応じかね

お姑の特技電化にくずれ去り

ビタミンは知らず古老の長寿法

台所だけが私のマイペース

御隣はトンカツらしい換気扇

マスコミの手にはおどらぬ主婦になり

骨壺を抱けばわびしい音を立て

路郎忌大阪句会へ一句

松江市 岡 崎 祥 月

みんな勤めて弁当が四つ

停年制どこふく風とベタル踏む

笠岡市 木 山 要 次

反駁もようせず戻る自己嫌悪

八幡浜市 平 田 三 立

友 逝 く

うぬばれて骨まで愛してもらつた氣
不手際を承知で通すやせ我慢

島根県 堀 江 芳 子

大阪へ送つて

手を添える夫の留守のものたりず
争うて笑つて夫といて楽し

鳥取市 藤 本 鎮 也

好きな人架空の人にして語り

幸不幸かわりもなく花は咲き

高槻市 山 田 ス ミ 子

流行を気にせぬ夫でそれでよし

尼崎市 平 井 露 芳

従妹結婚

今日よりの教師は妻の座をも兼ね

羽咋市 三 宅 ろ 亭

丸ついた紙だけ孫は見せにくる

大阪市 石 田 甚 太

苦吟して知恵の煙草も吸い尽し

茨木市 高 木 繁 太 郎

阿茶さんへ

見るからに花のかんばせとても古稀

伊丹市 椿 峯 代

おしやぶりにしたタクアンも母は食べ

尼崎市 岡 本 昭 三

朝寝坊これが娘の美容法

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

餡パンの空洞へ握りこぶしがは入りさう

愛媛県 澄 本 満 子

ボーナスの日に取り立てが社で待機

尼崎市 吉 川 イ ツ 子

ボーナスが出てから母の日を定め

東京都 浅 野 竜 泉

一円が合わず残業させられる

竹原市 時 広 一 路

氣を付けてやりたい黄色い傘が行き

京都府 菊 沢 破 天

きず口へふれる話へせき一つ

竹原市 小 島 蘭 幸

新築の部屋へ月賦が並べられ

広島県 高 橋 鬼 焼

真直に帰つてほしい靴すべり

竹原市 三宅 不朽

ビールでは気分が出ない黒田節

カルホルニア 齋藤 流路

線崩す術確かなり女

大和郡山市 中内 孚彦

日本人蛮風じみた強さなり

鳥取県 わたなべ・かずこ

いやな気のしない口説かれようもあり

伊丹市 春日 青争

なにげなくさりげなく触つた手

米子市 林登 良作

夕焼はしずかな波も赤く染め

米子市 林瑞 枝

童心ふとネオンの街で母を呼び

仙台市 川村 映輝

アメリカヘノーと云えない国に生き

大阪市 武居 寿美司

一徹をトレードマークにする強さ

堺市 羽田 一扇

恋心詩いきれない流行歌

米子市 石垣 花子

腹立を雨戸の音にさせて締め

ハワイ上 田紅 溪

ねむい目を受話器は覚ます友の計

鳥取市 近藤 秋星

表情に出さない人でこわがられ

名古屋市 花東 千久良

呼吸図つて飛びつく猫に教えられ

太田市 藤田 軒太楼

旅の夜の淋しさ電話してみよか

寝屋川市 福富 隆子

晩酌の額とおんなじ手内職

宇部市 櫛部 いさ夢

お化粧がへたとときりようは良いつもり

島根県 石田 清泉

空虚なる心を満たすちぎれ雲

鳥取市 藤本 佳女

再会へのこる末練が燃え上り

八幡浜市 別宮 すき

骨抜きにされた息子をくやしがり

愛媛県 豊島 二九三

男性用コンパクトにはおそれ入れ

スンガリーの

月

—大陸放浪—

東野大八

スンガリーは、ハルピンの銀座といわれるキタイスカヤ街をつききって出たところにある大河だ。水は衰しいばかりの泥水だった。

丸太作りのごく簡単な船つき場があって、アメリカ映画「セントルイスブルース」に出てくるような両輪のついた舟、あんな調子の舟が着く。吃水が浅いので、こんな糸車みたいなもので水を掻かねば、舟は動かないのだ。

舟はロシア式でドラム缶みたいな煙突が一本煙を吐いていて、そのそばに十姉妹の巣箱みたいな司令塔がついている。船長は大抵ロシア人で、金モールのヒサシの帽子と、金ビカの袖口をした黒い立派な服を着ていた。随

って粗末な舟や汚い中国人水夫どもの分にしていて、どこかからの借り物のようにみえた。

あるとき、私たちはこの舟に乗って富錦まで下った。満鉄詰の記者たちの慰安旅行である。予定は二泊三日で、三度三度大変なご馳走が、各種の酒をとりそろえて登場し、麻雀花札、碁、将棋が用意され、女までが十人乗っていた。

女たちは、ハルピンのカフェーや、置屋に棲息する美女嬌女で、われわれのサービス用に乗り込んできた連中だ。彼女らは日當を貰って、今というバカンス旅行だから、こんな結構な気晴しの旅はない。河風に太陽がいつぱいの船上で、お相手の連中は若くて気さくで、活気横溢のチョンガー記者連ときている。気骨が折れるどころか、丸つきり友達か坊や扱い天好^{テンハオ}謝々^{シャエエ}(大変有難い)である。こういうオナゴはんは、テンハオムードで酒が入ると、万事ソロバン抜き、時には味な気分におち入るので、あの方など、のどが乾いて水をのむような具合、ツーといえはカーで、ハナシの早いことといったら……もうよしよし、よう、テレちゃうから……。

さて、こんな大名旅行の夜に、私はお化けの如き満月をみた。北満の夏の月は、日本の月の如くお盆のようにくっきりしていて、遠くで艶然とふくみ笑いをしているような品のいいものではない。視野いっぱい、舟全部をすっぽりと抱え込みそうな壮大さで、あたり全部を金色におしくるんで迫ってくる。トン

とたたけば巨大なシンバルを打つ如く、耳をうるうるばかりに音をたてるのでないかと疑われた。

スンガリー下流の山々は、これまた仰臥した裸婦の曲線をみるように、なだらかな砂丘が青ビロードをまとった様だ。それが昼をあざむく爽涼の月光に隈なく照らし出されて、一望の青色天地を展開する。その山裾をノロの大隊が悠々とよぎっていく。エンジンの律動がなければ、この天地の静寂は、神ながらそのものであろう。

富錦は古将棋の駒を盤上によせ集めたような土くれと黒レンガの衆落であつたが、ここに日本人のカフェーと女郎屋があつたのには愕いた。

私は酔い潰れた船長の服の上衣をかつぱらい、五、六人の悪童どもと上陸した。夏の盛りなんだが、夜は零下に迫る寒さだから、ダブダブの船長服はかつこうのオーバー代りになった。

松乃家という料理屋に上り込んだ一同は、盛大な二次会に入った。くたぶれたお酌が五人もいたが、みんなお茶みきの最中なので歎呼して迎えた。

「オヤ船長、お名前は……？」

「なんとかスキー」

「ホホホ……」

てなことで、服のおかげで私は上席についた。相手の女は細引のように瘦せた大年増であつたが、座興にうたった小唄は見事であつた。それをほめると、ポータブルを持ち出し

てきて、レコードをかけた。足駄のハマミたいなごつい円盤でワシの印がついている。

「このレコードの主は、わたしよ」と女がそれをさし示してアゴをそびやかして言う。まんざらウソでもなさそうなので、

どうしてこんな大陸の果てまで流れついたかと私がきくと、女はいきなり杯洗のでかいのをつきつけて「つきなよ」と言った。

このあたりは、あと二月もすれば白一色で半歳の間、人の子一人も現われない死の街になってしまふ、砂金人足と兵隊のお相手で彼女らはその雪の惨めな下草のように、ここで一冬を過ごすのだそうだが、楽しみなのは酒とクスリ……

そういうえば、座に居合す女は、すべてアル中かモヒ患者ばかりのようだった。抱え主にきくと、せめてそれぐらいは大目にみないと居ついてくれませんか、という。

私たちはそこを出て、ぞろぞろとカフェへ三集会だが、そこでみる女も、松ノ家のお酌とどっちこちはない連中ばかり、今でもよれよれのナスビ色のキモノをきた、ばあさん女給のうらぶれた姿を忘れることはできない。

かって大陸に雄飛した日本人の行くところ必ず写真屋と女郎屋の姿があった。軍隊の軍靴の裏についたワラ屑のように、女たちは必ず、兵隊たちのかたわらに居た。彼女らは、酷寒といえども、素足にまといつくのは、腰間の紅い布切れだけである。中国人は「鉄の腰」だと感嘆していたことだが、こうした女

の中にシベリアお菊や、からゆきさんの白い顔もまじっている。その女たちの仲間には、数多くの鮮媚たちがいるのを忘れてはなるまい。

「パカにするナイ、テンノサマ、ヒトツチヤナイカ」

そう憤る彼女たちが独り見入るものは、一鉢の底にいろ赤い幾尾かの金魚。

スガガリーの月を憶い起すたびに、日本の遠い空にかかる月の白々しさに、私はいつも索然となる。あの白色地帯の重い雪底の女たちは、あれから一体どういう運命をたどっていったことか。

いまだ一冊、私の手許にあるポロポロの「川柳大陸」にこのときの句が載っている。スガガリーの月が、この句の中に、こうこうと金粉を舞わせて輝いている、その中にいる若い、わかい私。

マストからつばめが飛ぶと銅羅が鳴るそれからきけばイキナリ酔げというさんご珠むかしをきけば流行っ子慰めてやれば女は窓へ佇ち郷愁をせせら笑ったモヒの跡白じらと月も女もそれでよし

大陸望郷

中川晃男

東野大八氏が本誌に連続達筆を揮って居られる「大陸放浪」記を私は楽しみに読ませて貰っている。というのも今の中国、当時の支那山東省青島特別市に生れ、長じて満洲に転じ敗戦で昭和二十二年日本に引揚げるまで満鉄に勤めていた私のそれは第一の故郷だからである。

殊に大連、奉天、新京、哈爾濱の想出は深く齊々哈爾、墨爾根等にも足を伸ばし終戦時は通化の部隊に居た。東野氏の「砂金天国の街」大黒河ではラジオの雄壮な軍楽前奏で真珠湾攻撃のニュースに胸を躍らせたあの日が今でも生々しく浮かんて来る。凍結したアムール河越しにソ連領ブラゴエチエンスクが双眼鏡で手に取るように覗かれ、シューパーに着ぶくれた兵隊が銃を肩に引っかけて往ったり来たり警戒しているのが緑の木立の間に赤や青の屋根がとんがった絵画的情景とうらはらに国境らしい厳しさを見せていた。

ハルビンの中央寺院初め帝政ロシア風の建物に石畳の坂の街、エキゾチックなスガガリー河畔の風光は記憶のアルバムにしっかりと貼付されている。

家財を残して別れた大連の満人使用人等は元気に生きているだろうか。

「大陸放浪」記を読み乍ら過ぎ去った若き日の夢を追う私である。実母を済南に実父を大連に亡くしたアカシヤ匂う故郷を偲ぶ私である。

大陸の夢しなびつつ生き伸びる
過ぎ去った好き日が胸の中で生き

武田 信玄

(3)

富士野鞍馬

山本勘助

天目で武田末期の水をのみ (八九三〇)
一文は天目山ではたらかせ (四三三〇)
勝頼は茶碗義元桶で死に (一〇三三)
茶碗は天目山をいい、桶は桶狭間である。

勝頼

「日本外史」に「天正元年四月、信玄の疾復作りぬ。自ら起たざるを度り、諸將を召して後事を処す。勝頼をして衆を摂し、以て信勝(勝頼の子)の長ずるを俟たしむ。之れを試めて曰く「汝よ慎んで兵を佳とし以て我が国を亡ぼすことなかれ。吾死なば天下には独り一の謙信有のみ。汝は援を請い国を以て之れに託せ。彼一たび汝の託を受けば、必ず隣国と合して以て汝を侵さざるなり」と、言畢つて昏迷せり。」とあるように、信玄は、その子勝頼を誡めたが、勝頼はその後、老臣の諫めも用いず、頻りに兵を動かした。

信玄の母衣を勝頼みだす也 (四四一)

二代目のたけ田ぐあいかわるいな (四四二)

竹田のカラクリにもたとえられ、 (安八礼12)

飛車角を勝頼せいで只とられ (安六智3)
と、老臣馬場信勝、山県昌景も失ったのである。それを将棋の駒に見立てある。

勝頼は天正三年(一五七五)大軍を率いて三河の長篠城を攻めたが、城将奥平信昌の臣鳥居強右衛門勝商が、障害のある川底を潜つて、織田、徳川の陣へ連絡したので、織田二軍に粉砕された。

武田の仕掛長篠で糸がきれ (一三五二〇)
長篠で武田の仕掛け糸が切れ (五三八)
と詠まれ、竹田の操りにたとえられている。これから武田の衰運ということになる。

勝頼はひつしひつしとまげがこみ (安五仁3)

天正十年(一五八二)勝頼は、織田信長、徳川家康、北条氏政の連合軍に撃破されて、甲斐の天目山(八代郡と東山梨郡との境)の麓で、三十七才を一期として自刃したのであ

山本勘助晴幸は長享二年戊申(一四八八)三河の国加茂郡に生れ、今川義元に仕えていたが重視されなかつたので、牛久保(豊橋の北)に帰って隠棲していた。

牛久保に住んでものろくない軍師 (八七二三)

和漢の書ちんば引引そらんずる (一〇三)
鬼王の生れ替りが道鬼斎 (天六桜1)

勘介はむかし鬼だも知れず (七七)
勘助は、身体矮少、左の目は盲、右足は短く、片目跛足であったが、兵法の奥儀を究めていた。鬼王は曾我の従者で、信玄が曾我五郎の生れ変りといわれているので、勘助をそれに見立てている。

五体不具なれど武道の鬼神也 (九八二三・一一九五)

甲斐の武田信玄は、その兵学者を再三訪ねて、天文十二年(一五四三)板垣信方の推挙で、五十六才の勘助を武田の軍師として迎えたのである。

信玄と道鬼相求めた軍師 (二六八)

信玄の武勇に道鬼相もとめ

(拾四・四三三〇)

勘助は剃髪して道鬼と号した。それを易経の「同氣相求」にかけて川柳に作られている。それからは、武田の兵略軍機はすべて勘助の案であった。

諸士くすりくすり勘介初出仕 (一五六二)

勘介を笑ふ士卒は今参り (八〇一九)

勘介としらぬ間は笑ふ也 (武七十七)

勘助の短身、片目、跛足を、武田の将卒は笑ったであろう。今参りは新参である。

勘助も丸い一分に有付かれ (武一〇一八)

甲州金は丸形で、四匁のが一両、二匁のが二分、一匁のが一分で、

とくほんの薬札丸い一分なり (二五十七)

という句もある。信玄以来江戸時代まであったのである。

たとへ眼は蛸でも甲斐の柱なり

(一三八二九)

片々は蛸でも甲斐のはしら也 (八四二九)

白眼盲目を蛸と洒落、目を甲斐にかけて狂句にもなっている。

信玄の納所目つち坊主也

(傍二一〇・六九三二)

信玄も勘助も剃髪していたので納所と洒落

ている。

兵法を知らねばわるい目つき也 (三〇三〇)

戦はぬ日にもがんで軍書見る (一〇〇一五)

評定に勘助よほど中へ出る (五四九)

などと想作され

ちんばひきひきそれせめよそれから

一ツ目入道敵の氣をよく見越し (一六一〇)

山本が一眼ににらむ越後勢 (一四七二)

動きなきかため川中島軍師 (二二六二八)

目が一つ種え信玄やたら勝ち (二〇五三二)

と、川柳はその戦場まで想像している。

一ツ目は軍師蛇の目は勇士なり (八二二二)

蛇の目の紋は加藤清正である。

も一つで道鬼入道うめられる (三五二五)

もふ片目ないと勘介理められる (七二)

信玄は盲人を穴埋したというので、もう一

眼失えば——と詠まれ、

山本は茶にされないと越後勢

(七九二二)

山本を入れて越後の菓子を出し

(八四一七)

「山本山」という銘茶は今でもあ

る。それを山本勘助に洒落ている。

勘助を女にしたを暮によび

(二四三五)

片眼の持参金付の嫁にも洒落られ

ている。

弘治二年(一五五六)三月、三度

目の川中島合戦に、勘助は、謙信の

本陣を挟撃しようとして、その準備をしていた。謙信は、その炊煙を見てそれと察し、その夜にわかに兵を発して急襲した。武田勢は隊をととのえるひまもなく、勘助はここで戦死したのである。時に六十九才という。

飯を二度焚いたが道鬼落度也(安五松四)

たき置をせぬが勘助おちどなり(安六仁四)

とそ炊煙を詠み、

信玄の納所車で引殺し (二〇六一七)

勘助が簾相車で足を引 (八七一四)

車にはりこまれ道鬼しまひなり (一八七)

越後勢は、車がかりという軍法で攻めて来たので「一車」に洒落ている。

信玄は敗戦ではないが

勘助の片身信玄氣にいらす (四三一一)

信玄の負は一目してやられ (傍五五)

とも詠まれている。

何を選んでいたぐかは先様におねがいして

タカシマヤの商品券を

お贈りするのにも心に

くい贈物かと存じます



なんば日本橋
大東 東京 京都
三店に共通です

高島屋

いのちある句

— (4) —

戸田古方

川柳は散文ではありませんが、散文と同じ程度にわかりやすく、しかも詩特有の少ない文字の中に深い含蓄や余韻をこめていられるのです。それが読者に十分な想像の余地を残すことになるのです。

しかし、その含蓄や余韻といえども、わずかに十七音字ほどの程度までいけるか、この限度をはっきりさせることが大切な課題の一つといえます。

この辺のことをまず、日本詩歌のおこりとあり、元祖でもある万葉集に求めてみたいと思います。

万葉の諸歌は含蓄とか余韻をいうにあまり卒直すぎます。それだけに読むものをたじたじさせるほど強烈です。美しいものへの強い憧れを示し、そのまま死に通ずる愛を惜しまないのです。

「いくばくも 生けらじものを 何すとか 身をたな知りて 浪の音の 騒ぐ湊のおくつきに 妹がこやせる。」

(いくばくも生けられないでしように、なんで身のほどを知って、浪の音の騒ぐ湊の墓に愛する人は眠ってしまったのか。)

勝鹿の真間の娘子を読んだ歌です。真間手児奈は多くの男性に求婚され、いずれか一人に定めかねて、身を投げてしまおうという伝承であり、蘆屋処女は二人の男性に求婚され、いずれとも定めかねて身を投げてしまおうとい

う伝説です。……ことに蘆屋処女の死をきいて血沼壮士があとを追って池に投じ、さらに菟原壮士も続いて池に身を投ずるのは愛するもののために死をいとわぬ態度がみられます。これは伝説の世界においてですけれども、こういう伝説を語りつき、いい伝えた点に万葉時代の人々は愛に対して一つの純粋な生き方を見出したのでしよう。

そうして万葉集の相聞歌をみても、愛の強さ、はげしさをうたい、会うことができなかったら死を辞しない、という心をうたった歌がみられます。

「生きてあらは見まくも知らず 何しかも 死なむよ妹と夢に見えつる。」
(生きていれば会われる日もわからない、どうぞして死にましようよ、あなたと夢に見えた。)

このような愛のはげしさは、そのまま死に通ずるのです。愛のためには死をもいとわぬとするのです。

勝鹿の真間の娘子をよんだ歌からここまで久松潜一先生の「万葉集入門」(講談社現代新書)から引用させていただきます。このような万葉の歌を見ておられますと、かつて読んだ倉田百三氏の五幕物「処女の死」を思い出されます。

「かつて修道女であり、今、劇作家の内弟子として、業を積んで、初舞台までこぎつけた女優がいます。劇作家は初老をこえて行詰りした創作意欲へ新しいエネルギーをと、誠実な妻をさしおいて、この若い弟子を求めようとしています。危険な関係におち入ろうとする人は神に祈りながら踏みこえてはならぬ線にしがみつきます。始からたしなめ役に廻っていた筈の女の方が諦め切れずに自殺する、というのが「処女の死」の荒筋なんです。」

第18回西日本川柳大会案内

日時 九月十一日(日) 午前十時開会

場所 久米南町 弓削小学校講堂

兼題 趣味、名案、メモ、愛称、世話

自選句 未発表即発表を問わず三句

原稿用紙を用い、住所、氏名、雅号明記のこと。――参加者の名刺交換の意味で発表誌に掲載します。

中島生々庵、田中秀果、森中恵美子

大森風来子、服部十九平、片山巷雨

二〇〇円 投句一五〇円

九月八日必着のこと 岡山県久米郡久米南町 弓削川柳社

表投句先 岡山県知事賞をはじめ総合10位迄

使用の句 投句用箋はタテ20cmヨコ4cmの句箋

を投句のこと。

どうです、案外、さきに引いた万葉の「生きてあらは見まくも知らず」の歌とよく似ていると思いませんか。私の旧作に

顔色までは気がつかなんだ夕まぐれ

まるで婦系図の湯島の天神の場のような感じで呉れた人がありましたが、さようだと

作ったものでしたが、川柳人たちは腕を磨くために文学作品を読んで句を作ったり、劇や映画を見ながら作句することなどもよく行な

われてきました。人生詩の川柳では俳人たちのよくやる吟行にこれこそ相当するものだった

のでしよう。それにしても一句で作品全体を表わし、文学作品と釣合う句などというものは仲々望めそうにもありませんでした。

近

詠

大阪市 橋本 緑雨

長命の相だに見舞い云うて去に
養子養女気がかりな事多し
カーテンも動かす夏の扇風機
死にかけた人でしたと長生し
墓掃除してくるわと梅雨上り

須坂市 高峰 柳児

早寝してせめて抵抗の構え
仇名そのままで再会親しまれ
入知恵の啖阿だんだん言いよどみ
灸すえて停年間近を酷使する
耳打ちへ表情こわばってくる弱身

岐阜県 東野 大八

星のない男か夜のサングラス

一鉢の土に四季もつ花ざくら
童貞へすがしきものは白がすり

今治市 長野 文庫

プールとも知らずトンボは産み落し
文化文化まるで種なし西瓜に似
雑兵の如くニコヨン腰おろし
貧弱な顔格安に値ぶみされ
代理出す訳に参らず義理を欠き
プラタナ寿命短かい葉をひろげ

松山市 月原 宵明

冷蔵庫突然うなる妻の留守
子沢山客が並べてくれた踏
ビートルズ日本の狂気見て帰る
何処に眼があるか判らぬ犬を抱き

名古屋 長谷川 鮮山

本読みへ作者の意図が判りかけ
会計の綴つて廻した領収書
聞いているのかと雷落される



烏ヶ辻川柳会吟行

・森 下 愛 論・

国宝第一号で有名な弥勒（みろく）菩薩が
ある太秦の広隆寺うらの竹藪に囲まれた、蜂
ヶ岡寮にて吟行をしたときの記念撮影です。

出席者 春果・夏生・落児・史葉・幸男・

甘草・没食子・竹荘・愛論・草右

・良夫諸氏。

川柳塔社

常任理事会

八月四日午後六時から第七回常任理事会が本社で開かれた。

大会の経過報告から、金泥集が霞乃先生のご健康上当分休むことになったことを編集部から報告された。

「一路集・課題吟」が五句以内になった。

最近は何が多いので二選者にしてはという案も出たが「五句以内」だけが通過した。

創刊一周年記念会は十月九日(日)にきまつた。当日は三時から同人総会を開き、六時から句会という二段がまえになるのだが、

会場はいつもの千日前自安寺である。

大阪市文化祭市民川柳大会も近づき、内外の動きもせわしくなる。

十月号は雑詠選者七氏と白柳氏が「同人特集」に顔見世をすることになるので、ご期待をねがいます。

出席―生々庵、白柳、梅里、形水、恒明、唐佑、古方、水客、静馬、栞、小松園、一三夫諸氏。

*大会反省会

七月二十二日午後六時三十分から本社で路郎忌川柳大会の反省会が開かれた。

出席―白柳、柳太、多久志、栞、小松園、いさむ、すゝむ、薫風、与呂志、文秋、八郎梅里、恒明、舟遊、生々庵、一三夫諸氏。

痴盲録



高鷲亜鈍

(1)

五十余年の生涯を、喧噪とスモッグの都、大阪の地から、一步も出なかった私である。三十八年の二月中旬、大阪駅頭の、下り列車の凍てついた早朝のプラットに見送る人もなく、私は一人立っていた。「さよなら大阪」を口ずさみつつ。

その日に、尾道に着いてから今年で四年目になる。

大阪は離れかけても良いところ かほる句の通り、不義理のかずかずをかけたはしたけれど、友人、先輩、親戚、知己のいっばい居る大阪の方がやっぱり良い。又、一と頃路郎先生の手許に居て、雑誌の編集を手伝っていた機見女が、大阪を去って四国の故里に帰

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資
会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (06) 三四五二―四
夜間 (06) 四四〇八

られた時寄せられた句、

大阪の空はあのあたり天の川
がフイと浮んで来たりして、男らしもなく
感傷に浸る事もある。

大阪の誰彼が訪ねくるを待ち
アツという夢のまの大阪だった
大阪へみんなそろって帰りたい
大阪の旅もやつぱり暗い秋
手を曳かれながらキャバレー忘れず
大阪の空から巨星のおちること
男なる字が見えないままの石

初歩教室

題「引く」

菊沢小松園



- 引取りへ戸籍抄本までも出し
ボinasも税金引かれ蚊の涙
風邪引くと母転寝へ毛布掛け
全部一片の報告であつて何の感じも余情も
ない、第一句、第二句、共に句材で無い、第
三句もこれだけでは句にならぬ浅い。
①カーテンを引いて二人の夜にする 李 朋
②梅雨明けの部屋カーテンを軽く引く 紫
③カーテンを引いて小さな城守り 文 平
④カーテンを引かず月を蚊張りに入れ 要 次
⑤カーテンを引いて二人の城でいる 文 子
⑥二人の夜に救われて一句の要因に成功し
ている。③梅雨からやっと、解放された軽い
気持がよく出ている。③小さな部屋、二人だ
けの部屋かは知らんが城守りがよく冴えて微
笑しい、④初心者とは思えぬ技巧の勝った句
月光を蚊帳に入れる風情を頂く。⑤第三句と
同じことが言える二人の城と大胆に言い切っ
て面白い、五句共明るい句で成功している。
⑥おみくじを引いて嬉しい顔が寄り 晃
⑦賽銭を投げて大吉のみくじ引く K

- ③福引をひいて温泉ゆきとなり 政 夫
④おみくじを引く指先に願をかけ みやこ
⑤二度引けば答が二つあるみくじ 春 雄
⑥紙よりのくじを引かせる村祭り S
①よいおみくじを引いて親娘か姉妹かの顔
がよいがよい。②これだけでは平凡、句材で
あつて句ではない、③売店の売出しに温泉行
が当たつたであろう。普通なら行けぬ階級の
福引で思わぬ温泉行となつた。④指先に願を
かけた処がよい佳句として頂く。⑤悪いみく
じが当たつて引き直した吉になつたと言ふの
であらう二度引けば人間の弱さに触れる。
⑥これもくじが紙よりであつたというだけで
句にならぬ、手許にくじにする適当な物がな
い時に紙よりするのは常套手段であるから弱
い。
①波は引く綺麗な貝を磯に置き 宗 甫
②砂浜の汐干を足の裏に知り 湖 平
③遊ぶ子の靴知らぬ間に波が引き 瑞 枝
④句の通りきれいな句だ、絵葉書にしたい
景色であつても川柳として物足らぬも少し突

- 込みがほしい。②ちよつと手を入れたが原句
のままでほの句の運びが悪い、句材としてはよ
い処を捕えている。③砂浜の遊びに時間の過
ぎるのを忘れて、この靴は子供靴であらう、
素直な軽い句。
①その女も一線を引くかまへ 千 梢
②ささやかな抵抗紅を強くひき 芙 己 代
③逢引の喫茶の隅は人が待ち 初 甫
①引くと題に女の句が多いと思つたが意外
に少なかった、僅かに句意のはっきりしたの
は右の句だけ、警戒をした女が身のこなしで
態勢を備えたというところ、達者な句になつ
ている。③女の弱さをささやかと表現したの
であつて、世の中の男へ抵抗する強い女が下
五によく出ている。③何時も逢う決つた隅の
場所に見知らぬ他人がおつた、自分達だけが
決めた場所でも、二人に取つては、物足らな
さを感じたのだらう。
①仲裁が引くに引かれぬはめになり 寿 美 司
②御互に引くに引かれぬ意地をはり 竜 泉
③チョッカイが引くに引かれぬ破目に 竜 泉
④霊前で引くに引かれぬ長い愚痴 軒 太 楼
引くに引かれぬ中七が同じ句を寄せて見た
らこんな事になる、右の中で私としては①の
句に引かれる、仲裁だから面白い、②の句下
五をはりよりがありとする方句の形素直にな
る、③は軽い意味でのチョッカイなれば破目
になりは誇張に聞える。④霊前で引くに引か
れぬは不適当と思う。
①綱引きのしんがり勝つても土がつき 勝 子

- ②綱を引く意気がびったり沖の船 松風
③脈ありと見ておもむるに糸を引く 軒太楼
④幕を引く母へ幼児の拍手くる 保夫
⑤この理屈糸引く奴がおると知れ 百酒
⑥綱引きのしんがり皆にまかせきり 照一
- ①勝っても土が付きがちよつと角力のこと
が連想されて損だが決して、この場合狂句で
はない、見附け処面白い。②地引綱のことで
あるが、調子が沖の船と合い、位にする方
がはつきりするようだ。③中のおもむるにで
影の策師の様子がよく出ている。④幼児へ拍
手する句はあるが、母へ幼児が拍手する句は
珍しい、幼稚園か何かの除幕式的情景であろ
う、軽いタッチの句。⑤下五に難、あると知
りとすべきであろうか。⑥これではあまりに
責任のない句、もし事実であったとしても、
人間味から遠ざかる句材は避けてほしい。
- ①引く子の手握りなおして交叉点 花子
③引いた手はなれたせつな事故にあい 句楽坊
- ③石段で祖母の手を引き腰を押し 藤波
④除幕式遺児が引くのをささえる手 鳴子
①握りなおしてがよい、交通道徳川柳か、
子の親としては斯くあるべきであろう、ほの
ぼのとした人間味を感じる句、佳句として推
す。②これは前句と正反対の句、事実であつ
ても暗い句はなるべく避けたい。③孝道地に
壁ちた現在、明治生れの感傷がこの句を推し
た、人情味の溢れた句。④親の表彰式の除幕
風景であろうか、小さい遺児に囁かれる皆ん
なの眼、ささえる手は母親か微笑しい顕彰の

情景が句の上に出てゐる。

- ①特等のミシン当たる気まぜて引く すき
③馳け引きと知つたがもう間にあわず 亜也
③水引きはじめて施設が悪いと怒つてゐる
- ④引き眉毛女の清純うすう見え 静観堂
⑤面識の方へ引かれる人情味 双楽
⑥引き時と社長の椅子も後進へ 同楽
- ①下五まで引くが殊によい、小さな動作
も見過ぎぬ作句者の注意力に敬意を表した
い。②この場合もうは蛇足、反つて句を弱め
る知つた時には位いいで、余り言切れば説
明が勝つて損。③これも同じ怒つてるとまで
云わずとも現実の他のもので心境を示すべ
きである、悪いとこ目立ち。④いい句材だか説
明がこれも目立つ、作者の意志に添はぬかも
知れぬが、引き眉毛泥の中にも蓮は咲いて
面識のあると無いの違い、痛い処を突いて
いる。風雲を経た苦勞人の句。⑥同じ句主が
ら、これは落ちる説明に終つた。引き時と知
つた社長の廻り椅子、位いとめること。
- ①天引の貯金は他人のもののよう 白扇
②天引の税へ小言を云いとなり 鉄舟
③御用だとはかりに天引する税金 白江
④引き継ぎへ人の癖までいうておき 砂生
⑤今がよい引き時という第三者 千代
- ⑥深入りをして引きときを見失ひ
①社内貯金の天引であらう何れは帰るもの
ながら、他人の貯金のようにだと言ふ、面白い
社員心理。②サラリーマンの所得税か、正直
な階級の鬱憤はこわい。③古い時代語もちう

すれば生きると云う見本のような句、面白
い。④円満退職する行届いた人格が窺える佳
句に入る。⑤第三者の責任のない放言を突い
ている達者な句。⑥何の深入りかは知らんが
俗語白鷺を句にしたような、男女関係と見る
自制がつかなくなつた姿がよく出ている。

①これまでが友情ですと線を引き 竹雪
②引くだけの力を鐘の音に見え 破天
③値引きさせたその上掛でもつてゆき 正朗
④押し売りを隣へ知らず紐を引く 勝子
⑤醗酵味に引く一点に合せず凝視 辰始
①生活が厳しい現今、友情の限界を示した
句ずばりと云つた処に引かれる。②仏心の反

品質優良

タチカワペン



大府市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏

応を鐘の音をかりて現わした、少々廻りくどいが判る、理智的な句。③よくあることで説明のいらぬ句。④引くと云う課題に無理をしたよう、後に何も残らぬ。⑤川柳として漢字漢語を否定するものではないがこれでは無惨、一点に合わず凝視を、こなして句にする処が作句者なのではないだろうか。

①これ以上引けない足をまだ踏まれ 要次
②引く引く引く浮きを見つめる目が生きる みやこ

③引き継ぎの椅子人生の悲喜を知り 初市
④ミステリーめいて尾を引く流れ星 李朋

①ラッシュ時の満員車なのである、これ以上引けない足とは云い得て妙、痛さに顔をしがめた御当人も想像出来る佳句。③同じ語を重ねて時間的な経過を活写した処が句を生かした。③左遷か停年か一つの椅子を配しての、人生の悲喜その場の雰囲気もよく出ている。④流れ星に神秘性を感じもの、人々々のその時の心理状態であるうが、流れ星とミステリーがよくマッチして人を引き附ける句になった。

初歩教室と言っても中には相当の柳歴を経た句主も御見受けするが、別言の通り、私としては本欄投句の方々は、主旨として一応失礼ながら初心者として御扱いする随分礼を失する場合もあるかも知れないが御諒承を乞う。

尚投句の中に自信の句が問題にもならなかったとか、御不審な点等があれば、私宛御質問下されば、考えは述べるつもりでいる。御

投句全部に略符を附けて、選評に備えている御希望があれば、御遠慮なく御申出で下さる。

十月二十日締切・十二月号発表
題「弱点」 五句以内

宛先住居呼称変更

大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号

菊沢小松園

初歩教室

担当にあたって

菊沢小松園

白柳氏よりバトンを受け継いだ以上、一生懸命に遣ろうと思う、元より人各々の個性があり、顔が違うように、句の見方も違う。

句に対しての見方が違ふと言う意味で優秀と言う意味では決して無い、生来の非才、大方の御期待に副い得ないかも知れないが、長い川柳生活で句を見る眼は多少は養なわれて来たと自負している。仮りに一日十句宛見るとしても、月に三百句、年に三千六百句、四十年に余る川柳生活では十四万四千句見た勘定になる。日に二百句や三百句も眼を通す日もあれば実数はこの数倍にも及ぶかも知れない、鈍なりと言えど些か自負しても良いと思

っている。併し決して柳歴の古さだけが能ではない事は判っているが、今は亡き路郎先生も、良い句に数多く接し味うことが川柳上達の秘訣の一つに上げられていることを思い起せば、四十年の年輪決して無駄駄とは言わ

れまい、斯うした独り良がりの空廻りは、これ位にして扱って初歩教室担当者として、私の方針に依ってお互に勉強して行き度いと思うが、相当の川柳経験を持っておられ、各句会の選者などをしている方々を鳥潜しく御指導申上げるような大それた厚顔さは遺憾ながら、私には無い。こうした方々と共に手を執って研究練習するには他に方法もあるうし、又川柳雑誌以来の川柳塔には適当な人が多士済々である、敢て私などの出る幕ではないと思う。人間淘汰の詩としての理想に向って一歩一歩作句階段を踏みしめて登って行き度い。妙な癖や曲った道に迷い込まないよう些やかな道案内になれば望外の喜びである。

そしてナイーブな心で川柳の門を叩いた人達の心に答えたい、心境の一端を披瀝して大方諸兄姉の御後援を御願する次第である。石段の高さを曲垣飲み込ませ

小松園記



田中辰二先生逝く

— 麻生霞乃先生に —

佐野ト占

した。

脳軟化症が併発して意識不明の連絡がありましたので、二十六日午後お見舞に参りました。病室があき次第入院されますように申しておられ、こんなに急に御逝去なさるとは全く夢のようです。

私がこちらへ参りましてから二十二年間、親身にまさるお世話になりました。暇を見つけてはお訪ね申上げておりましたが、それを大変喜んでいただき、あまり長居しては御病気に障ってはと存じ、帰ろうとしましても、なかなか離そうとはされませんでした。

路郎先生がお亡くなりなれましてからちょうど一年おくれて、後を追われて旅立たれました。お浄土で又再会されて堅く手を握っておられることと存じます。一昨年遠路わざわざお見舞に来られ、お達者なお姿が目に見えておりました路郎先生が先きに御逝去になり、今にも御逝去されはせぬかと案じておりました辰二先生が、路郎先生より一年長生きされたの不思議なことに存じます。

田中辰二先生は、熊日柳壇選者で雅号は鳴風。熊大名誉教授で明治二十五年東京都生まれ、大正七年東大国文学科卒業後、旧制の福知山中、豊橋高女各教頭を経て大正十一年から五高教授を勤められ、熊大法文学部教授を三十二年退官、名与教授。また三十三年から七年間熊本女子短大の講師を勤められました。

江戸文学を専攻、近松、川柳文学の權威で独特の口調とユーモアあふれる講義は学生間

で人気を集めておられました。
美喜子奥様からもくれぐれもよろしくお伝えくださいとのことでした。

柳界短信

▼大阪市民文化祭川柳大会

▼十一月二十日（日）にきまる。

▼選者は堀口塊人氏、岡橋寛介氏、中島生々庵氏、生島鳥語氏の予定。題やそのほかのことは次号で発表

▼西尾榮氏（本社渉外部長）は八月十日、右記川柳大会の打ち合わせに他社の方々や主催側と会談された。

▼川柳長屋連（東京都）は七月三十一日二時から東京都築地の中央会館で二十周年記念の句会と祝宴を盛大に行なわれた。関西からは、ふ誌の房川素生氏と本社の河相すゝむ氏が出席。

▼河相すゝむ氏（西宮市）は別報大陸同窓会にも出席、朝鮮や満州時代の柳誌を出席諸氏に披露して大変よろこばれたとのこと

▼福田丁路氏（高槻市）は42年間の公務を去られ金蘭会学園に勤務。自宅電話局番変更、〇七二六（九六）二六三四番。

▼不二田一三夫氏（大阪市）は三人の愛嬢が果立った勝山小学校の盆おどりの歌詞を執筆、八月九日同校々庭で盛大に発表会が催された。なお同校の校歌も氏の作詩によるものである。（薫）

優 勢

杉原愛鳩選

優勢な母校へテレビ手をたたき
優勢ときいて応援団がふえ
優勢のほうへ力をかしたが
優勢とみれば解説すぐにほめ
判定は進んで攻めた方にあげ
優勢となった碁盤へ始業ベル
優勢になって応援わきかえり
優勢な国力で無理押してくる
優勢なほうへ応援出来ぬ性
優勢な人に巻かれて自嘲する
優勢の報へ祝盃用意する
優勢のまま日没と云う不運
優勢な警官の数へデモが散り
煙突の煙優勢そうな色
優勢に発達台風のアナウンス
ライバルの優勢クーラー自家用車
優勢をしるテレビはコマーシャル
優勢であるが違反の匂いもし
子供皆味方につけてママ優勢

一本がとれず優勢勝ちとなり
優勢は労組の票を信じ切り
優勢な顔が居並ぶクラス会
親友が来て優勢になる議論
金があるだけ優勢と見られてい
ライバルに手をさしやるゆとり持ち
優勢の重荷は勝と決めた評
優勢に油断があった肩すかし
雑草が優勢種がまだ生えず
ニンマリと敵の次の手待っている
物量の優勢キザな口をきく
優勢とどちらも思っていたうかつ
優勢な選挙事務所の明るい灯
優勢はとんでもないと支度部屋
どう見ても優勢だよとおだてとき
優勢な方の飼いの主見ぬふりし
佳
歩をついて優勢ゆっくり火を
優勢な方が手堅い策をとり
内の子が抜くぞ8ミリいそがしい
男前の点でライバルより有利
ど天井でまだ優勢を信じ切り
人
優勢かまもとパトロン乗ってこず
地
優勢な選手だけ追う報道車
天
優勢な予想も知らず馬がすね
文平
金三
初甫
不朽
七面山
千代
章雅
章雅
要次
亜也
恵二朗
秋月
花子
野迷路
恵二朗
弘生
春己
代仕男
不水
七面山
古方
十九平
いさ夢
宗太郎

肩

軸
優勢な方から出した妥協案

不二田一三夫選

肩と肩並べて妻と麦を刈る
熱戦譜見ている方の肩がこり
立ち飲み知らない肩と肩が触れ
肩代りする気の意見きつく言う
先生の肩は子供に頼もしい
肩の手がこそばゆい程の仲となり
肩にガタ来てからエースの座
肩寄せてひな鳥母の帰り待ち
若者の肩にリュックの平和な日
肩で息抜きの所作は見破られ
すねた肩のびて来る手を持つ女
はすかいの肩に祭のだしが行き
大江
退院も近し肩の線も生き
楽屋での女形男の肩でいる
肩巾はゆったり老いの身のおし
まかし余がついてると肩を張り
肩までつかれと大きな手がおさえ
狸寝の肩をふとんに入れてくれ
晋嗣
代仕男
昭三
千代
文平
野迷路
露芳
花子
春己
光郎
句楽坊
金魚
秋月
魚山
弥生
不酔
破天
静水

肩たたき修学旅行の子のみやげ 鳴子
 さかろうて夫の肩が細う見え 芳子
 合格の肩がみどりの風を切る 恵二朗
 山男肩にしつかり命綱 紫
 肩車僕が高いと得意の子 いさ夢
 音羽屋を肩にかついだ馬の脚 正朗
 仁王さんの肩で小鳩がとばけてた 古方
 飲んで肩くめば子供の頃のうた 愛鳩
 雑貨屋のような肩書ヌツと出し 不水
 演劇部員肩いからせて武士の役 寿美司
 鉢巻が国へ抗議の肩を組み 旭峰
 OBのファイトやたらに肩叩き 露声
 母の肩叩く手国を動かす手 花子
 佳
 肩たたき次第に弱くなって百 清泉
 二十年目の肩を叩いた手の温み 七面山
 遍路宿互に肩を揉み合うて 十九平
 肩越しに大臣席はささやけり 水車
 妻の肩もんで少々酔うたかな 文子
 肩巾の広さへ覗く男のエゴ 弥生
 肩書を抜いた名刺にある重み 砂生
 肩上げが京の舞妓にまだ残り 章雅
 鳩が肩の手入れしている濃霧 古方
 肩抱き合い巨頭の演技見事なり 白汀
 人
 ランドセルはみ出る肩にやっとう 初甫
 地
 肩越しにのぞいて私もいます顔 瑞枝

肩が凝りましたと指名されずすみ 千翁

茶の間

大鶴喜由選

生きている喜びお茶のうまい朝
 かあさんがいゝ茶の間に寄つて
 2DK茶の間と呼べる部屋もなし
 花嫁に茶の間のみだれのぞかせず
 赤ん坊が寝て茶の間お茶を入れ
 妻の居ぬ茶の間電気を早く消し
 喜びも悩みも茶の間みんな聞き
 招かざる客へ茶の間に立つ筈
 「おはなはん」茶の間の人気一人占め
 応接間で頼み茶の間で念を押さ
 一匹の虫が茶の間をわけてさせ
 宿題の知恵も茶の間へ借りて来る
 あがれとも云わぬ茶の間へ通る仲
 里帰り茶の間の母はやさしかり
 浜木綿のある茶の間でテレビ見る
 茶の間明日のプランが生れて来
 和の色紙生かし茶の間の睦まじさ

竹雪 千代 木魚 古方 花子 一扇 百酒 野路 舞子 宗太郎 瑞枝 良作 愛鳩 英子 歌子 清泉 石染

腹の底見せ合うている茶の間
 家計簿へまだ起きて茶の間の灯
 茶の間を笑いがもれるうれしい日
 里帰り茶の間に愚痴を少し分け
 里帰り今日は茶の間に客で座し
 味噌汁の香り茶の間が呼んでる
 茶の間には飴玉もあり酒もあり
 兄弟喧嘩茶の間へ涙持ってくる
 父を待つ茶の間茶の間の灯が消えず
 釣天狗茶の間を飾る魚拓掛け
 喜びも悲しみも知っている茶の間
 母の日の茶の間我流を父が立て
 美容体操するには茶の間狭すぎる
 子等が寝て茶の間は風去ったよう
 誕生日茶の間は小さいお客さま
 佳
 お茶の間を荒した孫の片えくぼ
 「おはなはん」見て茶の間の動き出し
 ひとり娘が嫁った茶の間の隙間風
 一日の無事が茶の間へみな揃い
 合格を真中にして茶の間湧き
 人
 甘い仲茶の間のこけし目をつむり
 何喋ることもなく茶の間のさし向い
 地
 お茶の間で円う取りなす妻がいる
 天
 弥生 静水 鬼焼 春雄 越子 軒太楼 三立 旭峯 いさ夢 弘心 千翁 十九平 佳女 鎮也 千久良 魚山 みやこ 文平 恵二朗 文子 初甫 金三

「夕刊」

入選発表

選者 清水白柳
 入選 六百七十二句
 八 十 句

夕刊を読んで夜警は気を配り
 夕刊は見たよ電車は空いていた
 通勤と暑さで夕刊読めず寝る
 夕刊を敷いてホームで夜を明かし
 夕刊に汗のあとつく日の高さ
 テレビに抜けがけされてくる夕刊
 終着まで夕刊顔にあてて寝る
 駅前の事故に夕刊売り切れる
 スモッグもなし夕刊も来ない町
 夕刊の運勢欄も読んで寝る
 夕刊を敷きたそがれの雲となり
 吊り皮で夕刊を読み今日も無事

夕刊で昼のニュースを確かめる
 残業の夜食へ夕刊添えあり
 夕刊を持たせて夜勤送り出し
 新聞少年日曜午後のプラン練る
 夕刊を巻いて夜勤のバスに乗る
 共稼ぎ夕刊だけことが足り
 夕刊を提げて隣りが飛んで来る
 たまに株持って夕刊買いはじめ
 キャンデーをしやぶり夕刊汚と来
 朝刊の持ち逃げ夕刊で捕えられ
 酔うた顔かくす夕刊買うて乗り
 夕刊の膝に座ってパパが好き

朝刊の白を夕刊くつがえし
 ああ飯かそうかと夕刊読みふけり
 漫画先きに見といてパパ夕刊よ
 ぬすみ読む夕刊次ぎの駅で降り
 夕刊を取りに出て見る回復期
 夕刊を配った足で来る夜学
 惚れてる方が待つもの夕刊読もう
 急行が通過夕刊ちゃんとする
 夕刊へ赤で刷り込む補回戦
 ハイライトの釣りで夕刊買えり
 夕刊の小説ネーヤ先きに読み
 夕刊にマダムの欠伸包まれる
 夕刊の隅まで読んで妻を待ち
 晩酌が過ぎて夕刊読まず寝る
 始球式だけで夕刊間にあわせ
 夕刊を三つ買うてて乗り遅れ
 小説を読む夕刊を頼まれる
 東京 泰造
 門 真 鉄 児
 奈良 十 悟
 神戸 どんたく
 大阪 金 三
 山口 弘 道
 大阪 野 迷 路
 大阪 恵 二 朗
 大阪 琴 女
 大阪 十六 里
 京都 句 楽 坊
 玉 島 旭 峯
 岡山 十九 平
 岡山 藤 波
 岡山 忠 三
 富田 林 東 雲 楼
 倉 吉 弘 朗
 笠 岡 遠 二

九月の句会

玉造川柳会

時 十日(土)午後六時
 題 実り、沈黙、スタミナ
 所 玉造交差点南へ一〇〇米
 大阪信用金庫

南大阪川柳会

時 二十日(火)午後六時
 題 くもる、美德、坂、
 ボンコツ
 所 アベノ区松崎町三ノ一〇
 大 萬

そんなことあったか夕刊借るを見る
 疲り帰ったのに夕刊の嫌な記事
 夕刊は網棚へ妻子に見せられず
 一城のあるじ夕刊売りの台
 夕刊と月賦下宿で待つており
 夕刊は母が配って定時制
 夕刊売りいつもの顔へサツと抜き
 打水にぬらし夕刊叱られる
 食いかけの子が夕刊をひきちぎり
 いま降りた坐席の夕刊拾うて読み
 食卓に夕刊かけて妻不在
 デモ解散の手に夕刊をかう小銭

大阪弘生

ナイターへ夕刊買うて敷くつもり
夕刊に先客のあり夏休み

風鈴をほめて夕刊おいて行き
夕刊で見たと電話で吃驚し

夕刊を敷いて夜汽車の靴を脱ぎ
夕刊を読んでもうに風呂が沸き

夕刊の来るまで留守番寝てしま
家計簿の赤字夕刊だけにす

空腹で夕刊読んでる共稼ぎ
ママとボクババの夕刊気に入

七面八臂夕刊とビールと枝豆と
欲求不満のよう夕刊の来ぬ日

夕刊が来る豆腐屋が行く気さ
大阪春果

石曾根民郎著「古川柳信濃めぐり」が昭和
四十一年七月二十日松本市大手三丁目五の一

三十一年の川柳社から発行された。著者はその
序に、「信濃に住み、川柳にいそしんでいる

と、古い川柳で信濃にまつわるものを見かけ
たり、また信濃の民俗やお祭りや人物などに

関心を持つようになる。本書はいつのまにか
それでまとまったのである。

非常に古くまとったところを書いてあったり、
突然新しい事が出会って面喰らうように

してある。書いた本人がそれを承知している
新旧雑然とした雰囲気になかで信濃をわかっ

てもらいたいというわけである。」とあり、

ビヤードンへ夕刊買き直行し
夕刊は寝ころんで読むものとなり

夕刊は読むひまもない儲けよう
夕刊とテレビ併用して眠り

夕刊のミス朝刊の隅で詫び
五客

大阪旅風

まだぬくい夕刊配る桜ばし
夕刊をひろげて妻の愚痴を避け

夕刊が来ておしやべりが尻をあげ
夕刊を靴べらにして夜をく

山の湯の朝夕刊も添えてくる
人ノ句

夕刊の大きな字にはおどろかず
笠岡 遠二

「寝転んだら、仰向けになつたりして、さて
きょうは俺の誕生日だが何が書いてあるのだ

ろうーそんなことを考えてパラリッとその日
附のところを読んでいううちに、あれを読ん

で見よう、そこを覗いてやろうとなればしめ
たものである。」と書いてある。全くその通

りの本で、三百六十五日一日一句風に構成、
解説と説話が展開する。

昨秋、松本市民文化賞を受賞した著者にう
ってつけの好著である。定価三百円、送料五

十円。
山田圭都著句集「花束」が、昭和四十一年

七月一日金沢市寺町四丁目一七の二四番傘え

大阪痴亭

夕刊熟読そろそろ這いよる倦怠期
天ノ句

夕刊を丸めて寝てる子を起し
選者吟

人の身の記事に夕刊賑やかな
大萬川柳ベストン

（八月現在）
三三、五大阪

二五、〇大阪
二二、〇南河内

二一、五大阪
二〇、五泉北

一八、五布施
一七、〇大阪

九八七六五四三二一
痴阿清好美吸柳梅水

亭茶人郎房江志客
大萬川柳ベストン

（八月現在）
三三、五大阪

二五、〇大阪
二二、〇南河内

二一、五大阪
二〇、五泉北

一八、五布施
一七、〇大阪

九八七六五四三二一
痴阿清好美吸柳梅水

亭茶人郎房江志客
大萬川柳ベストン

（八月現在）
三三、五大阪

二五、〇大阪
二二、〇南河内

一〇可住
一六、五篠山

一一没食子
一六、〇高槻

一二静馬
一六、〇和歌山

一三木魚
一五、五大阪

一四文秋
一五、五見島

一五惠二朗
一五、〇松原

一六万太郎
一四、五奈良

一七宗竺
一四、五岸和田

一八凡茶
一四、〇大阪

一九きさ子
以下略

二〇春巢
以下略

次ぎの兼題「マーク」
五句以内

十月の兼題「片思い」
五句以内

締切十月二十五日
締切十月二十五日

投稿先
大阪市阿倍野区松崎町

三ノ十
大萬川柳会

んびつ川柳社から発行された。昭和十一年生
れの著者の十年余りの作品の集大成で四百六

十句。句風は軽妙、穿ちというものを自家薬
籠中のものとしてしている感が深い。例えば、

ソビエトの民謡こわい国でなし
二人三脚社長と組んでビリになり

☆ 柳 界 展 望 ☆



前列左から、緑之助・正朗・白柳・薫風・後列左から
明朗・清泉・一三夫・大八・水客諸氏・慶沢園で・
(藤井明朗氏撮影)

(橋 高 薫 風 担 当)

▼堀口塊人氏(西宮市)より「路郎忌苦勞さまでした。酒ものめないので途中で失礼いたしました。その時のお若い婦人(脇田梅子女史のこと)との写真拝受女房に見せて自慢いたしました。厚く御礼申し上げます。女史と並び教授みたいな顔になり——うかうかと風呂敷包み撮される——塊人

仙台市役所前仙台信用金庫七階大ホールで開催。兼題・宝石・社説・双生児・血・いつでも一緒、各題二句、河北賞、夢助賞授け者賞、外賞品多数、授けは百五十円封入の上、九月二十日までに仙台市東八番丁一七〇後藤方東北川柳大会係宛。▼中島生々庵主幹(大阪市)は別項掲載の通り第十八回西日本川柳大会に久しぶりに大阪を離れ出席され

ることになったが、本社の同人多数の同行出席をお願い申し上げる。出席予定の方は予め本社へ連絡下されば宿舎などの斡旋便宜をはからせて載く。▼「馬」十五号は現代・川柳作家自選作品集を七月一日に発行、五十七名の作品を発表、「鷹」三十三号は北村雨垂特別作品「私」百句を特集、他の「海図」「不死鳥」「流水」誌等と共に発展解消して統合されることになり「川柳ジャーナル」誌が誕生。その他は前号で紹介。▼備前川柳社(岡山市)で七月二十三日、恒例の「うどん祭」句会を浜田久米雄居で開催。みんなよく飲みよくたべられたとのこと。▼西尾栗氏(八尾市)は得意先七十名を招待して、七月十六日の夜行で乗鞍岳へ登り、平湯温泉で一泊、下呂温泉で一泊という清遊で都塵を洗われた。「出湯はめで今度は家族連でくるといふ」

賞、「宿浴衣こおろぎ橋の風に立ち」▼浜田久米雄氏は七月十五日から十八日まで全国鉄川柳人連盟大会に山形上ノ山温泉へ遊ばれたが、あいにくの雨で観光は濡れどおしであった。▼西出一栄さん(大阪市)はお身体のかげが悪く玉のぞ七月句会に欠席されたので、出席者一同はお見舞の寄せ書きをして、清子さんとお二人に届けられた。▼川岡霊眼子氏(諫早市)から「去る七月三日諫早市の氏神天満神社で献額取替の夏季大会が開催され泣顔もめでたく写す宮参り光重などの掲額がなされた。▼宮口笛生氏(奈良市)は全国鉄川柳大会約二百名の出席者中、七位に入賞、帰阪後直ちに吹田の関西鉄道学園へ入学、国鉄近代化に遅れじと、四十代、五十代のものばかりの入寮生活講習会です。新しい勉強ばかりでチンプンカンプンです。一チンプンカン午後の授業がねむくなり▼村上春己氏(奈良市)が暑中見舞を頂戴したが、平城宮跡の遺跡から出土した

た瓦の破片の自作の拓本で美しい模様が奈良からの便りの味がにじみ出ていた。年賀状にはやはり出土品の馬の木片を拓本にした奥床しいものであったが、時代を経た尊さと贈り主の丹精とで毎年のそれが楽しまれる。▼徳島鬼外遺句百句集が五月八日姫路市豊沢町一三一大井正夫氏の手で発刊になった。非売品、私の体になつた下駄をはく。▼藤村メ女さん(大阪市)

美 し い 心

美 し い 花

富田林 栄社公(07212) 2064

は七月十日、姉妹連れ立って田舎の両親を誘い出し、三保の関、松江、玉造温泉、一畑薬師、出雲大社、皆生温泉と巡遊、親孝行の旅を楽しまれたのでよんこころなく路郎忌川柳大会には欠席された。

▼小島無聖氏(宝塚市)は小西無鬼氏に協力して、かつての黄金時代の篠山を再現さすべく目下運動中で、近い将来きっとやって見えますと力強いおたよりをいただいた。

▼ウイロー社(ハワイ)の方々から、近作柳樹の選者諸氏が交代で選句や選評をしてお礼として年二回金一封を本誌の発展費として送ってくださることになった。

▼羽原静歩氏(守口市)は日本私立幼稚園連盟の研究會に参加、鹿児島指宿からお便りがあつた。桜島にて噴煙にしばし浮世を忘れかけ——静歩。

新同人紹介

楠田英子

芳仙・一三夫 推薦



踊りの会で舞う
三井静夢さん

りの病床生活で作句も字も書けなくなつたとご家族からの通信、ご全快を祈る。

▼大谷月都氏(岐阜市)から川柳塔の皆さんが岐阜へこられたらぜひお立寄りをお願いします。岐阜市白蘭町三ノ二七。

▼長谷沢義英氏(大阪市)は四月から大阪市立助松養護学校校長として活躍されている。

▼渋谷三時氏(布施市)は六月初めから寝たり起きたり。

▼山田季賛氏(高槻市)は吹田市の朝日ビル工場を見学——見学にきて朝日ビルの味を賞め——季賛。

▼一杯水川柳会(下関市)は七月二十四日同市福王禪寺で故麻生路郎師追善句会開催。同人中村九呂平氏から盛会の寄せ書が届けられた。

▼八木摩太郎氏(堺市)は七月二十五日から新潟、佐渡善光寺、軽井沢、東京方面へと徳子夫人同伴で旅をたのしまれた。——四十九里はるか新潟灯は見えず——摩太郎。

▼中島生々庵主幹(大阪市)は八月六日番傘の「水府忌全国川柳大会」の兼題選者として出席。ほかに本社からも多数出席、盛会だった。

▼清水白柳氏(大阪府)は外孫ではすでに三人の祖父ではあるが、内孫が八月四日に誕生、女児だがうれいよと目を細めていられる。おめでと。

▼大陸柳人同窓會が八月二日から四日まで九州九重観光ホテルで開かれた。本社同人河相すゑ氏も参加して盛會。大井正夫氏とすゑ氏から寄せ書をいただいた。

▼若柳潮花氏(高槻市)は

名取証の書替えて名取り全員の講習を受けるため家元のけい古場で汗だくのこと。また盆踊りの振付けなどで相変らずご多忙らしい。

▼橋高薫風(大阪市)は家族づれで上京、東京タワーから見下ろしたブルのあのデラックスホテルに幸が「泊るのよ、絶対よ」との主張をいれてやったが、やっぱり家族連れの旅より気の合った友人が独りの方が良い——三百三十三米タワーを仰ぎつつ背泳——薫風。

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に

▲タタ薬品

アリナミンA



本社八月旬会

会場 自安寺
五日午後六時

猛暑のパンチに創立以来的の不振だった。与呂志さんのように毎月五時には会場へはいって、最後の片づけまでしてくれる熱心な人が、この日はかりは「セエがないナ」ごもつともごもつとも。

生々庵主幹が大会の謝辞をのべられたあと、白柳さんがスケールの大きい柳話をさげで登壇。〃川雉〃以前の路郎先生の句などを披露され大きな反響をよんだ。これは近く本誌に連載される予定である。

〃自分一人ぐらいい休んでも〃集団活動にはこれが一番こわい。「川柳忌」には一人でも多くご出席ください。

(河井庸佑整理)

出席—与呂志・知恵・八郎・一三夫・操子・双楽・文秋・庸佑・誓二・痴亭・梅里・水客・甘草・白溪子・たつみ・静馬・弓彦・多蘭子・宏子・伊三郎・白柳・静歩・古方・吸江・露芳・花梢・摩天郎・凡九郎・金三・芙巳代・野迷路・生々庵・恒明・一扇・神田・

千梢・天樹・亜成・形水・清人・孚彦・舟遊
句楽坊・有子・弥生・季賛・葉子

席題「ハイウェイ」 神谷凡九郎選

初免許ハイウェイ避けて細い道
ハイウェイ冷房車も見られてる
とにかくも新車ハイウェイへ滑り込み
ハイウェイ静かに景色動いてる
自動車の心も知らずハイウェイ
百キロで風切るデイト俺が春
ハイウェイボンヤリとたで済んだ
ハイウェイ過たところで砂ぼこり
ハイウェイ制限時速がものたらず
工事費を聞きしみにハイウェイ
ハイウェイ登はん車線はミですみ
ハイウェイ聖地風地を嘔りとり
ハイウェイ女の顔の冷静な
追跡のスリルにも似たハイウェイ
ハイウェイいたちまつす横断す
ハイウェイ内密々の恋をのせ
銀行を見下して行くハイウェイ
ハイウェイ気にも黒のサンガラス
トンネルの風情たまたハイウェイ
買出しの思い出があるハイウェイ
ハイウェイノロノロ行きな景色
ハイウェイに信号燈がいるような
ハイウェイ通れずオンボロ羞なし

神田 孚彦 古方 古方 葛城 千梢 与呂志 孚彦 一三夫 操子 古方 句楽坊 水客 白柳 天樹 花梢 水客 与呂志 操子 梅里 恒明 一扇 静馬

未完成のハイウェイを歩るいて見
ハイウェイ汚れず別府の灯が真下
ハイウェイ妙なところへ陽が沈む
遠火事が見えかくれてハイウェイ
素通りに町がさびれたハイウェイ
ハイウェイの陽炎うららうらら

席題「夏バテ」 本多清人選

夏バテへ薬売れてる瓶の山
夏バテにくすりくすりの日がつづ
夏バテへ食い付くコマーシャル
夏バテへホルモン料理の日がつづ
鰻レバーと夏バテへ挑戦し
夏バテに蟬の声さうとましく
夏バテという手で逃げる月の末
わたくしに夏バテという好い言葉
お茶漬で流し夏バテ叱られる
夏バテか熊長々と岩にはう
夏バテと日焼け鏡におもしろく
贅沢な夏バテ儲かりすぎている
夏瘦せですと集金の弱気
何もせぬ奴も夏バテ口にする
夏バテはしたがスタイルうれし
口ぐも夏バテマジシャン勝ち続け
夏バテも夜のネオンに眼が冴える
夏バテをいうまい宿の風にいて
夏バテに負けずラッッシュ押し

芙巳代 天樹 水客 白溪子 静馬 生々庵 多蘭子 与呂志 古方 弥生 千梢 吸江 弓彦 八郎 操子 葛城 操子 生々庵 水客 孚彦 たつみ 形水 弥生 天樹 白溪子

冷房で汗をかかずにバテル夏
夏バテを妻をもらったせいにされ
気がねのう夏バテ知らぬ妻でよし
夏バテといえる間は飯が食え
夏バテを欲求不満に結びつけ
夏バテへ手形は猶予してくれず
服だぶり夏バテ気づき嬉しがり
夏バテも知らない身分の別荘地
バテている胃袋ビールで活を入れ
夏バテに社長の顔もにがり切り
夏バテへ気を使ってる台所
目覚しのベル夏バテを追いたてる
飲む段になれず夏バテ口にせず

雅号ぶっちゃけばなし

(19)

ちよう



・木村千容・

きむら

某年某月句会後の懇談の席で、千代男(その頃の号)さんは青年作家とばかり思いこんでいたが、会ってみると、六十をすぎた、ご老人であったのに驚いたという話が出た。そのころ故路郎師選の新聞柳壇に熱心に投句していた時代であったので、師はすかさず、千代男は青年作家ではない、彼は候文作家であると評され改号を示唆されたので千容と改めた。千代男にしても千容にしても何のへんてつもない只本名の「長」に執着をもっただけのことでそう深い考えも意味もないが、千容の容は寛容の容でいささか自戒の意を含んでいることをつけ加えます。

(会社役員 八十歳)

亜成 一扇 凡九郎 神田 梅里 静馬 千梢 弥生 露芳 摩太郎 操子 与呂志 一三夫

夏バテを知らぬ社長にある秘策
二男二女夏バテ口を閉じている
夏バテを金策いっそ輪をかけてる
金のかからん方で夏バテおきながら
まだあがる物価に夏バテついてり
夏バテの肩にくいこむプラカード
夏バテヘジリ砂がやけてくる
夏バテにエースもしばう二軍落ち

席題「帰省」

海士天樹選

庸佑 天樹 恒明 恒明 清人 舟遊 英巳代 水客 恒明 恒明 恒明

お見合いも墓参も兼ねてする帰省
鉄骨の母校帰省をよろこばせ
出張を兼ねた帰省の途中下車
故里に残した恋がある帰省
気に入りの理容師ただいま帰省中
交通公社訃りで帰省先きを知り
年寄りの手紙で帰省思い立ち
息抜きの帰省ブンヤが嘆きつける
帰省して見てはならぬネオンの灯
ためるだけためた下着と帰省する
老操縦士空の帰省8に舞い
孟蘭盆会何があっても帰省する
ビートルズのような頭で帰省する
帰省した息子を母はふれあるき
帰省して父の墓石の無表情
職業がやっと安定した帰省
帰省して故郷の嘘が突きささり
帰省して青葉若葉へ御辞儀する
帰省して父母の写真の下で寝る
島の墓帰省の涙かくせない

兼題「パンチ」

傍島静馬選

減量でパンチがきかぬチャンピオン
パンチが有るから無いとお茶の間審査員
ドスのパンチのと物騒な賞め言葉
札束のパンチがきいてのし上り
パンチ効く駄洒落満座をかつ浚い

露芳 操里 梅秋 文秋 清人 白柳 誓二 梅里 生々庵 芙巳代 多蘭子 野迷路 形水 花梢 生々庵 文秋 生々庵 葛城 摩天郎 天樹 葉子 あいき 阿茶 阿茶 滋雀

改札のパンチ美人をのぞきこみ
座布団でママのパンチを防ぐパパ
パンチきく女の語尾がからみ合い
痛烈に一発食わしている社説
パンチあるCM飲ん出ぬパンチ
女房の無言のパンチ胸に来る
豆歌手のパンチ司会者つりこまれ
余りにもパンチ効かまてちまい
過信したパンチ上には上がいた
強烈なパンチが空へかわされる
W過剰パンチの効かぬ顔を待ち
師のパンチ明日の徒弟を育て上げ
パンチちときすぎたらし愛の鞭
改札のパンチへ発車ベルが鳴る
パンチくれた師があり今日の位置
善人の口数パンチ秘めている
一発のパンチに予想裏返し
人間になれるパンチと思えども
押し売りへパンチ効か四十後家
二言目パンチくらわす手の早さ
終業ベルパンチの効いた音で鳴り
三つ目のパンチへ女破烈する
口喧嘩でもった方から飛ぶパンチ
慰める言葉にパンチ利かしとく
初孫のパンチヘダウンもして見ま
俺の徹履まし度くないこのパンチ
友情のパンチどっちも泣いている

花 梢 梅 里 清 人 露 芳 一 扇 天 樹 誓 二 恒 明 天 樹 文 秋 句 楽 坊 生 々 庵 白 柳 千 梢 水 客 吸 江 古 方 多 蘭 子 双 楽 昭 三 葛 城 葛 城 水 客 八 郎 恒 明

兼題「滝」 高橋操子選

倦怠期一発やったるかと思ひ
観光へ滝の伝説デッチあげ
富士五湖の滝をテレビで見も茶の間
床の滝かけてこれから夏の陣
鯉も住む故郷の滝は静かなり
滝一つどここの茶店も見える位置
ここからは歩いてください滝の音
流しびき茶店のおでんへ客が混み
ふるりの滝もろともにダムになり
滝見せておいてガイドは息を入れ
永久の黙否権滝の音つづく
滝浴びる心の邪悪ふり払い
岩壁を曲ればひんやり滝の霧
千年の音たゆみなく流しびき
ハネムーン滝はバックに撮るカラ
泣く如く歌うが如く滝の音
流しびき七色の虹へ神秘めき
滝あびてから上人は名を残し
冷蔵庫がわりに滝つば使う茶屋
縄を張れば滝つば神秘めき
絶壁の赤肌滝の水涸れて
伝説の滝に悲恋の音絶えず
ロープウェイ滝ははるかの谷に
滝壺の冷たさ気持ちよいタオル
滝浴びて誓った禁酒もう忘れ

静 馬 恒 明 あいき どんたく 昭 三 一 三 夫 恒 明 白 溪 子 弓 彦 弥 生 生 々 庵 痴 亭 浮 彦 天 樹 吸 江 野 迷 路 千 梢 摩 天 郎 双 楽 与 志 葛 城 梅 里 白 柳 痴 亭

兼題「手がかり」 八木摩天郎選

滝壺のあゆ二三尾が涼を呼び
滝一つ点景にして山暮れる
商魂が滝を自然のままおかず
先頭はとくに滝で風を入れ
滝壺の深さは空をうつさない
一尺の滝も数えた案内書
工場の騒音に似て滝涼し
岩つばめ滝のしぶきをもてあそび
流しびき虹をえがいてよろこばれ

誓 二 凡 九 郎 恒 明 水 客 弓 彦 文 秋 操 子 干 夏 与 志 梅 里 阿 茶 繁 太 郎 初 甫 操 子 静 馬 生 々 庵 水 客 生 々 庵 静 馬 文 秋 金 三 白 溪 子 恒 明

手がかりは大物過ぎてもみ消され
手がかりがないと三面宙に浮き
手がかりの唯ローマ字の頭文字
手がかりを求め教育ママ走り
手がかりのつかめぬままに一周忌
手がかりへオシの証言はかどらず
恋の手がかり坊やを丸めこみ
手がかりの端緒となった私生活
手がかりをやっとつかんだ日の安堵
愛人が二人手がかり二つ出き
手がかりをつかんだ顔のなわのれん
手がかりを探せば噂だまりこみ
手がかりをおしえてくれた片笑くほ

梅里 針程の手がかり推理の筋が出来
静歩 手がかりは電話で聞いたなまりで
舟遊 昇進の手がかり死んでもはなれぬ氣
一扇 乳飲子に顔見られたと気がつかず
千梢 手がかりも無い左遷の責を負い
一三夫 手がかりも無いまま母と子と生さず
葉子 手がかりの情夫が死体になつて浮き
梅里 手がかりに情婦のある日聞く日也
昭三
たつみ
静歩
生々庵
花梢

兼題「歴史」

戸田古方選

落書へ歴史もなんの文化財
瓜に火をともし歴史の幕ひらく
年代順の一行記事にある歴史
滋雀
凡九郎
金三

雅号ぶっちゃけばなし

(20)

ひちめんさん



・直原七面山・

じきはら

家の横を泉川と言う小川が流れてい
る。この清流をさかのぼってゆけば名
勝の地お滝様がある。そしてこの滝をふところに抱く
山、それがいわゆる七面山である。私が川柳を初めた
頃には、詩を作ったり随筆などを書いていたのでペン
ネームを二つも持っていた。だがそれらは川柳向きで
はなかった。弓削平氏居においてしばしば句会を持っ
ていたのだが句報を発行することになったのでどうし
ても雅号が必要になった。そこでふと頭に浮んだ七面
山はどうだろうと皆なに計ったところ、一言のもとに
それが良いそれが良いと言うことで簡単に決つてしま
った。従つて、この雅号についてはこれと言う深い意
味はない。

(公務員 五十四歳)

郷土史を見れば我が家は古戦場
伝説を固持し史実歪められ
観光のこんな所にある歴史
見習いのガイドが歴史を吃りかけ
社の歴史梁に明治のちりをのせ
川のない橋の歴史が街つくる
社運良し歴史に残す墨をすり
田舎にも小さい歴史浮き沈み
わが子の歴史夫婦喧嘩のことにもあれ
所詮史上の男でないという安堵
歴史とは書いて残したのと違い
花の名は知らず歴史の庭に立つ
歴史流れて大仏さまは変わらない
ブルトリーザ手で掘る土器へ待たれる

吸江 梅里 操子 白溪子 清人 天樹 昭三 双葉 生々庵 凡九郎 与呂志 水客 舟遊 滋雀 弓彦 白溪子 清人 繁太郎 千久良 水客 恒明 生々庵 恒明 舟遊 古方

☆ 訂正 八月号41P「せつかな靴音パパが
すぐ分かり」は梅志氏の作。



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

玉造川柳会 (大阪市)

西出一栄報

母危篤夜行列車の窓に雨
銀行を待たせ現金持つ出る
ウナ電で返して北浜を買いあさり
かまぼこのついでに買った鱧の皮
ビヤガーデン屋上だから流行り
外人も来たら観光地らしくなり
日本人へ馴れた手真似の土産店
日本のよき外人に教えられ
顕微鏡電子レンズに座をゆずり
ミクロンの世界をレンズあはし
偏光のレンズが欲しい世を生きて
流っぱを柿々のぞく水の色
デックから拝まれている那智の滝
滝口に落ちて折箱右ひだり
滝近く霧を浴びてく白い蝶
騒音も滝は涼しく聞かすなり
発心をしてから滝を尋ねて見
滝全部入れたら顔が小さすぎ

照柳一
白六電
古方
寿美司
あいき
柳宏子
章雅舟
滋九郎
凡月
半仙洞
風念坊
貞秋山
文三馬
金馬

南大阪川柳会

金井文秋報

雄図空しく地方公務員で終り
脱ぎすてて旅の機嫌がまだ残り

貝殻の化石が開発おくらせる
今日もまたがめつく生きる紅を
下心脱げのくずせのまあ飲めの
砂浜へじわじわ伸るアスファルト
無器用な手付でパパは子を脱がせ
寝そべつた足の太さは砂をもち
つたない色つけて貝殻売って
公務員盟廻しの判コ押す
公務員に閉じこもって雑音聴こえる
公務員面白くなって待たすよう
脱ぎすててにす気楽さを妻が待ち
砂浜にねてどぞこの陽のぬくさ
高座で脱ぐ紋付を借りて出る
白足袋を脱げば宮司も好々爺
月給を確かめ愛をうち明ける
人よりも判コ信じる公務員
過もなく不遇もなく勤続の公務員
口紅も強く打算と立ち向い
夏バテで胎児安じる里の母
アベックの立ちざりしあと踏む
細く長く暮しますよと公務員
脱いだ殻土に残して蟬の恋

静馬
英代
梅里
弓彦
柳宏子
あいき
古方
滋九郎
集雀
千白柳
痴亭
八重子
金三郎
文秋
柳志郎
凡九郎
双子
千子
季雅
章雅

標札へ雅号も書いて余技で生き
余技と云うので実費も出ぬ謝礼
本職の苦勞を余技はまだ知らず
そろばん抜きです余技にこりば
見学に真面目はメモを書きつづけ
説明は前列だけが聞いている
見学に來たのに判らぬまま帰れ
エキストラ富士の裾野に集められ

森下愛論報

日ノ丸川柳米子大会報

石坂新電報

まだ高い波へ生活の舟が出る

三站

波静か二人の話もときれがち
波風をしのぎ通した老の皺
降る雨の一つ一つにある波紋
人のんだ波おだやかに岸に寄せ
波みつめ日ねも糸のたれたまま
童心にかえって波とたわむれる
波音の遠く聞える宿につき
恋人の寄せ合う肩に春の月
寄る年に勝てず子に負け孫に負け
寄り添ったベンチ蚊追う余裕見せ
寄る年に応戦して髪を染め
寄せ書きも寄りそうに妻は書き
足元に寄れば雀もにくまれず
新家庭余り寄るなど気をきかし
新らたに割勘にするコップ酒
叱られたのが寄つてする謝思会
勤けよ奇麗で居よと妻へ欲
欲に生き無欲に老いて財を寄附
青空に人間の欲の小さいこと
生る欲八十路を生きて灸をすえ
ざりざりの年令で欲を捨て嫁に
欲ばりが過ぎて重荷の里帰り
欲張りを泣かせて無尽また倒れ
欲しいえはなんど何でもケチをつけ
来賓席隣りも代理らし顔
栄転のあとへ代理が座り込み
難問に代理を仕立て場をしのぎ
課長代理こども人事の水たまり
宿題を親が代理でまにあわせ
祝辞読む代理は誤字にフト迷い
お湯そそぐ子にも女の所作がみえ
気兼ねして蛇口静かに貰い風呂
骨休め鍋釜持つて行く湯治
石嶮の効かぬお湯から出る小唄

日枝子
富堂枝
布光子
太光子
博可志
静可志
八重子
近重子
静子
つる子
茂保子
瑞歩子
独雀子
天穂子
秀穂子
蒼水子
花子
一子
華子
多子
吾子
達子
静子
節子
新雪枝

打吹川柳会（倉吉市）

奥谷弘朗報

事故現場安全地獄に花絶えず
ハンドルを握れば無口な人になり
寝る前にガス管見るときめておき
安全な明日を誓わず子の寝顔
安全に安全に一等航海士
安全週間署長無事故の夢をみる
安全に悔なし車人も無事
手を挙げて渡る歩道を疑わず
安全な遊び場団地の隅に持ち
安全を守る誇りに老警手
譲られて譲って今日も車降り
明日も又安全願うネジを締め
魔のカーブ避け安全な回り道
安全を祈る社に鳩も群れ

花独歩子
茂多香
由多香
酔歩
好江
永断
白溪子
独歩子
明志生
近布堂
千代

安全へ助手が念押す交又点
安全を誓う指切りして別れ
自動車を通しゆっくり踏むペダル
車なら飲むなどマダムにささる
安全に行けと灯台灯を入れる
安全を信じのんびりバスに揺れる
寝る前にガス安全をたしかめる
鯉職仰ぐ倅せ安全デー
母だけは子の安全へ寝つかれず
高知川柳社（高知市）
川竹松風報

石花菜
みつえ
祥月
源太夫
礎山
茗人
明朗
大鳥
弘朗
一歩
羅春
吞洋
舞子
文子
句念坊

雅号ぶつちやけばなし

(21)

・かしよう・



・藤岡花梢・

・ふじおか・

「花梢さんでもっとお若い方だと
思っていました……」ある日の句
会でお目にかかったその方のイメージをこわしたの
だと思っています。

とてもよい雅号だと皆さん賞めて下さるのですが
自分で満足するような句が仲々できません。川柳に
手を染めたのが五年前で富田林市婦人会主催の講演
（川柳とは）で八木摩太郎先生の熱心なお話により
の灯を燃しました。実はこの名附親、育ての親も摩
太郎先生です。公民館活動として毎月例会をもち精
進いたしております。一筋に死ぬまで川柳の道を続
けるつもりでいます。

（無職 五十八才）

飲まされて無口本心さらけ出し
本心をただす視線のまぶしすぎ
本心をかくしてピエロの恋寂し
本心は孫が抱きたいベレー帽
スキヤンダルみんな知ってる
居残りをするBGにある野心
良心を売って屋台の酒を浴び
耳打ちを聞いている方が笑ひ
愛秘めて療舎に耐える千賀鶴
灰皿が二合は飲んだ主賓席
小姑の小言へ嫁として耐える

備前川柳社

横山一報

お薄にはなじめぬ我家の家計なり
お茶だけで帰らぬらしい米をとぐ
無念ではあるが番茶が性にあい
もう少し居てほしいから茶をすめ
初対面番茶でかるくあらわれ
故里の味はやっぱり茶の香り
茶柱のたつ日に届くいい便り
老人の恋はお茶飲むだけでよし
保険屋を丸く断るお茶を注ぎ
お茶受けがもう少しほしいもの
ロボットのよう茶席の人となり
お茶では乾いたのはもうおせす
お茶より器の方を自慢する
出歩けば金ひっそりと茶をすすり
麦食べて育ちましたと肉体美
麦の青团地の白が目に残り
血圧が上つて始めて麦を食べ
廻診のときは灰皿だけかくし
パチンコ屋で吸がらの溜る台に行

閑谷吟行句会

横山一報

戦火を逃れ国宝蟻にまけ

緋呂志

勝知子
美知子
仲雄
伊昌志
寛雨
紅松
夢松
康之
蟠蛇
静子
静月
芳野
伊子
の久
良江
一風
胡洲
正坊
秋月
卓雄
久米
水雄
英子
文子
正文
正美

柳良春四朝文与流的不敬之久灯幽静初識 哲紀寛十里一三柳香曙芳幸千佐饒娘正
五 呂 ぼ ぶ米 九 風 加 句
郎江江郎二平志風朽子子雄竿谷子美嘉 郎子子平風声 六子梢花月仙翁恵坊築洲

雅葉勢永季精坦求
俊香火斷贊二水女

淡正孤清季正鉄翠利喜久子
舟則舟流贊二竜児芳郎
たし飛水一萬白
し客求的溪子
松亭
きみと
凡々
与呂志
醉升
クロー
漫多郎
天樹
茶々坊
雅々
三十四
みのる
緑雨
春巢
志報

背広着て小さく通る釜ヶ崎
(淡舟代退職へ)
庭もあり庭には石もあり我が家

あすなる川柳会 (大阪市)

寝返りはママの方へと打って行き
男下駄かざって用心深く住み
禿てもホステス握手で送り出し
恋しさは握手の上へ手を重ね
叱られたまんま昼寝をしまし
歳費引上げ今日は昼寝をしまし
西瓜の種をつけて昼寝が起きて

どんぐり川柳会 (羽曳野市) 川村好郎報

雅号ぶつちやけばなし いそうろう



・松岡委滄浪・

・まつおか・

与呂志
春巢

弓彦
百酒
よしを
好郎
ゆきを
梅里
素郎
庄助
文代
若舟

(22)

大正の中頃ニッポン道華やか
に、万葉の桜標の色がソロソロ紅毛
の神経に触れだした若かりし日、漢文の老師が取り
澄して難騒懐沙之賦を講じて呉れたが、庶民の子と
して多少の反骨があったのか、漁父の辞のサワリど
ころ「聖人は物に凝滞せず能く世と推移す。世人皆
濁らば何ぞその泥を漏し。世人皆酔はば何ぞその糟
を鋪はざる。何か故に深く思ひ高く挙り自ら放たれ
しむ」と訓し「滄浪の水清める以って吾が纓を濯ふ
可く、滄浪の水濁れる以って吾が足を濯ふ可し」が
私の弥次性にピッタリと来てそれ以来かく号して
居る。
(国体役員 六十七才)

旅からの便りやっぱり素直な子
洗濯を干し上げ小さな幸福感
山ほどの洗濯妻に殺気あり
洗濯も見舞いのうちと妻洗う
鯉のぼりおしめも負けずに風に
私はこれぬ洗濯機じやと妻
明日は晴れ隣りに廻る洗濯機
お見合いをにおわせている便り
とげんに元氣にしている母の文
出稼きの汗がしたたる父の文
書き方も話題になった子の便り
泣き笑いしながら読んでいる子
車座に話題のつきぬ洗濯機
必要にせまり洗濯もするひとり
洗濯にありし日の妻思う
喜こばれ今更冗談だとも云えず
冗談だ冗談だよとあやまれば

史好
芙蓉
鬼秋
芳秋
重夫
玉水
白扇
一美
めくみ
於干
久郎
直己
静水
英明

妻はまだ洗濯がありしまい風呂
どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

サービスのつもりが慣れつこころ
給料日妻のサービスかわりなし
サービスはなさそう延着証明書
四五人は産みたいなどとう別れ
四五人もよればたきの声になり
四五人に絞り選考もはやじめ
気の合ふ四五人連を張るキャンプ
本心で合ふサービス口足らず
サービス品買ったが子供身合
サービス品のまなざしに足る
サービス品買ったばかりに高く
奉仕デー広告代を買わされる
三十女サービス品を見逃がさず
かゆいとことどくサービス気
社長より僕にサービスする仲居
銀行のサービスチャッカリ貯金箱
サービスのつもりか祝祭日ふやし
ぼちぼちとチップの効果あらわし
大雨に貸した雨傘思い出し
お茶漬が好きな夫婦で子が出来ず
四五人が来て女学生一つ買い
四五人までは見合おぼえてい

かがみ川柳社 (岡山県)

池田古心報

溪仙
雅子
有子
秋月
あつき

好郎
集一
吸江
幸子
マコト
凡亭
弥生
誠二
肇雪
一馬
喜々
岳々
生太
孝太
雄太
喜代
子の
薫郎
好郎

残暑御見舞い

申し上げます

川柳塔社

果を守る蜂反抗の針をとぎ
人前を飾って内輪もめ初め
人前で出さばる癖がまだ止まず
人前で何食わぬ顔真犯人
人前を耐えた涙のせきが切れ
生意気な男が来たと座をはなれ
生意気な口だがあどけない笑く
人前をつくるう涙わいて来ず

岸和田川柳会（大阪府） 高橋操子報

あやめ満開喪服の列のつづく庭
長靴でまともと叩く水だまり
長靴の母再婚へ耳薙さず
やりくりをそろばんだけが知る
旅役者子役に祝儀あつめさせ
旅役者衣裳つづの色のも褪せ
旅役者こは馴染のあるところ
激流を竿一本に托す枝
激流を逆転さしてダム工事
船頭は必死激流いい景色

南海川柳会（大阪市） 辻圭水報

入場券やう売り込まず持てあまし
入場券やうと間にあひ義理がすみ
入場券持たぬボスには知らぬ顔
入場券定員オパー知っており
入場券持った世話役顔見せず

たけはら川柳会

山内静水報

親切をしたあとと気がいい
道聞けばわざと連れ行つて
親切を種に点数かせいどき
譲られた座席に残る温かみ
不愛想な親切黙つて腕を貸し
気まぐれの親切へ皆なびく
親切と言ふ名で吊り皮リズミカル
親切もそこから先は押売りさ
旅先の親切我が家へ持ち帰り
不感なお夢のかけらを探しつ
湯加減を聞いてもらえぬ察に慣れ
親切も素直にとれぬ反抗期
親切を忘れた頃に便りくれ
べそをかく小さいな子に譲る席
親切な人についてに荷を持たせ
あの野郎女の子だけに親切な
旅は道連れお子さん膝へとつて

騙されて人の親切こわくなり
恥かしい親切に逢う故郷の駅
むぎ出しの親切に逢う故郷の駅
親切を受けてそれから恋になり
マンガ読む隣の兄貴子供なり
捨て犬を子供のように可愛がり
日曜の朝寝子供にゆすぶられ
子供の日やつぱり母は子を叱り
子供等の夢を教育ママが消し
思い出は子供の時食べた味
もう一人の俺は子供を当てにせず
とことんまで聞かねばならぬ子供
子供には見せぬ鉢巻した先生
子供等の世界は嘘のない世界
すつぱりと夕陽が包む野良仕事
おねだりの前に子供はよく動き
子供等の意見も一応う聞いて定め
子供等は無邪気そのものの美しい

子供等の目に最高の母であり
指切りを信じ切つての子の寝顔
目の前に白ゆり咲いていい香り
空高く高く舞うとび僕を見つめ
一人娘を他人であげてからの趣味
世話の女房でうまい酒が呑め
湯上りの鏡に満足す
わんぱくの坊やがすり顔あらし
おけしようとか薬まじがに箱にぬり
オキシフル蟹のように泡をふき
アリナミン気分だけハッスルし
日本人くすりに頼つて弱くなり
この薬効くのかとかいでおる
看護婦も何んの薬か飲んでおる
二日酔い薬も飲んで社を休み
床上げの廊下の隅に薬びん
なが患い情性の薬で高いびき
バス旅行酔わぬ薬で高いびき
朗になるお薬を猪口で飲み
赤ちやんのクスリへ乳房待ちかま
置き薬り飲んで夜明けを待たさ
お大事にとそつと出された薬びん
おくすりを出せばポツポツは治り
気やすめの薬とさうさ知るベッド
野良猫にかわいいリボンつけて
誕生日ほしいうりリボンを買つて
せつかくのりリボンに顔にマッチ
信じられぬ黒いリボンの中の顔
少女趣味と言われリボンが似合
胸にリボンつけて団体系しくなり
工作のりリボンママにも作つたげ
お祝の友情溢れるりリボン解き
小さいがリボンをついた贈り物
リボンの子鏡へ何んどのぞきま
姉の留守姉のリボンをつけて見る

久松子 松美子 無門 延平 文平 笹水 緑水 静雨 不敏 敏彦 万司 静水 静火 不政 政子 堀司 操居 菁恵 澄路 蘭幸 康宏 笑子

子供等の目に最高の母であり
指切りを信じ切つての子の寝顔
目の前に白ゆり咲いていい香り
空高く高く舞うとび僕を見つめ
一人娘を他人であげてからの趣味
世話の女房でうまい酒が呑め
湯上りの鏡に満足す
わんぱくの坊やがすり顔あらし
おけしようとか薬まじがに箱にぬり
オキシフル蟹のように泡をふき
アリナミン気分だけハッスルし
日本人くすりに頼つて弱くなり
この薬効くのかとかいでおる
看護婦も何んの薬か飲んでおる
二日酔い薬も飲んで社を休み
床上げの廊下の隅に薬びん
なが患い情性の薬で高いびき
バス旅行酔わぬ薬で高いびき
朗になるお薬を猪口で飲み
赤ちやんのクスリへ乳房待ちかま
置き薬り飲んで夜明けを待たさ
お大事にとそつと出された薬びん
おくすりを出せばポツポツは治り
気やすめの薬とさうさ知るベッド
野良猫にかわいいリボンつけて
誕生日ほしいうりリボンを買つて
せつかくのりリボンに顔にマッチ
信じられぬ黒いリボンの中の顔
少女趣味と言われリボンが似合
胸にリボンつけて団体系しくなり
工作のりリボンママにも作つたげ
お祝の友情溢れるりリボン解き
小さいがリボンをついた贈り物
リボンの子鏡へ何んどのぞきま
姉の留守姉のリボンをつけて見る

房枝 清夫 鬼出 春日 雅子 直清 清久 静美 不敏 笑次 万司 豊海 茶路 峰泉 無門 輝子 輝子 房出 尾夫 扇居 政己 蘭舟 操子 万火 雅鳳

悴せな端切れリボンになつて添い
いらいらとさせるあの娘は僕の夢
お早うの顔も明るい雨上り
卒業証書リボンは友の手で巻かれ
アルパムの昔リボンを思い出し
振り向いた方もおんなじリボン
お出かけの姉さん日傘をパットし
良心に言い訳をしてつまみ食い
一寸とした風邪でぐらつまみ食い
美容体操隣もそつとやつている
ひん曲る竿アベックの足を止め
うらはらの笑顔をつくる雨の午後
一日のスター茶漬のうまいこと
ひとりの男として笑ひ忘れたる

オーエスケー川柳会 (大阪市)

夕涼みネオン着に生ビール
ビヤガーデン気炎あげてる女性群
見渡せば甘いムードのビヤホール
隣の娘二杯目あげた大ジョッキ
飲み逃げるように度々トイレ
明日からは禁煙禁煙ビール飲む
中元のビールよ来い来いもて来い
よくぞまあ無事だったかと脇に汗
冷房のない日は落ちる玉の汗
新記録達成汗をふきもせず
黒い汗を流して清く生きんとす
汗かくは未来の為と気にならず
玉の汗われ働いたぞとつい笑顔
満員で汗と汗との腕がふれ
汗の結晶よるこびに光る顔
労働者の流れる汗はほんもの
汗っかきぬれた座布団裏返し
病む身にはあの日の汗をもう一度
ひや汗はどんな汗かと子に聞かれ

形水報

静俊 後澄 凡焼 鬼子 洋子 不悦 房枝 清静 和志

清雅 健常 美重 貞豊 真重 東亜 重博 誠雄 神元 有元
人兒 坊夢 露造 成人 勝泉 弘田 一助

ひやかしの見本しまいに買わされ
見本帳過去の記録をよくとどめ
見本だとくれた分まで金とられ
不注意の見本にされる間の悪さ
背番号をこつちへ向けて汗をふき
セールの汗を乾いたまま帰り
炎天の汗が乾いたまま帰り

駒つなぎ川柳会 (大阪市) 南柳報

忠造 順彦 貞彦 形仙 白入 柳報

初孫の誕生から妻泊りぐせ
孫が出来俺の誕生日を忘れ
誕生日母も忘れる子沢山
大鯛を一箸ずつの誕生日
さしつさされつ今宵を妻と誕生日
お誕生祝もやっぱり差があつた
誕生に法話は釈迦を喋らせる
町会へ仲間入りする顔となり
ご近所の善意尊いものと知り
鍵かけて近所目礼だけにする
善し悪しは別に近所のおつき合
敵味方あつて近所もまます
近所から物言いのつく物干場
苦笑して注文多き髪を刈る
けつまずきいそいで起る苦笑

明朗川柳会 (大阪市)

田中多幸報

無理やりに司会やらされ玉の汗
生甲斐は汗で働き子を育て
鼻に汗かいて他人の世話をやき
参観日手を上げぬ子に汗流し
汗を拭く田植の顔は土だらけ
夕涼み帰りのバスで汗をかき
汗と油ボーナスの有難み
顔の汗マメに働くコンパクト
デモ行進汗止めでない鉢巻ぞ

繁幸 源幸 久幸 芳休 濁江 金泉 子泉 水江

年輪はあつていお茶にて汗をとめ
好きになれば汗の臭も気にならず
無りよ寺の灸の良ききき汗流れ
汗かいてじつとこらえるお茶の席
汗かきで困るこまると大ジョッキ
汗かいて両手の豆にある稼ぎ
ふじかけ短詩睦会 (鳥取県) 藤本礎山報

宴会・折詰・出張パーティ

大 萬

阿倍野区松崎町
TEL 02 5031・5032
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL 04 9184

弘登 一明 清江 富生 恵郎 和一 大治 鎮一 秀雄 梅乃 昭好 長男

●九 輪 水 煙●

▼皆さんのおかげで
いよいよ一周年記念
号を出すまでになっ
た。柳誌としてのス
タイルも出来たよう
だし、ことに同人特
集はユニークなもの
となった。執筆諸先
生のご支援は大きく
とにかくここまで伸ばして
くだったのである。

▼峠を一つ越したが、さて
これからの道はけわしいこ
とであろう。いろいろな不
届きの点もあることであ
ろ。こんごともなにとぞ
よろしくご指導たまわります
ようお願いいたします。

▼葭乃先生の「金泥集」が
★昭和33年から「川雉」の
柳翁忌句会で新選者を推薦

今月かぎりでも当分お休みを
いただくことになったのは
なんととてもさびしいこと
だが、葭乃先生のご健康の
ためとあればやむを得ない。

▼課題吟を五句以内にしま
が、いい句を集中してくださ
い。

▼雑誌を良くするために
読者をふやさねばならな
い。よろしくお願いいたし
ます。

（清水白柳）

● 2 D K ●

★この九月二十三日が初代
川柳の百七十七回忌にあた
る。

★昭和33年から「川雉」の
柳翁忌句会で新選者を推薦

川柳塔社の

柳箋が出来ました

サイズは本誌と同じです。
ちよっとイキなスタイルです。

一冊（五十枚） 六十五円
送料 三十五円

本社川柳忌句会

日時 九月五日（月）午後六時
会場 自安寺（妙見さん）
市電千日前下車スグ北側
（電話211・1478番）

兼題 「ステレオ」
「欠点」
「計算器」

席題 「計裏器」
三題（題と選者は当日発表）各題三句

会費 百五十円
★投句だけの方は切手50円封入

川村好郎
辻白溪子
金井文秋
富岡淡舟
若本多志選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鯉谷仲之町20

川柳塔社

電話 大阪 06 3985番

10月の兼題 「カップル」「虫」
「週末」「栄光」

することになっていた。毎
年そのころになると、故路
郎先生から新選者候補を提
示するよう命ぜられていた
のである。

★「ことしははくがきみを
推薦するよ」と毎年先生が
ばくにおっしゃるのだが、
その人材でないばかりはそ
のどノラリクラーと逃げて
いた。だが「路郎賞」を三
年連続でいただいたときは

を理由にことわってこられ
たのである。
★主幹や白柳さんからばく
に代選の命令がくだった。
マゴマゴしていると編集に
こまるので、こんどはイヤ
オーなしだった。しかも今
月ははくにとつてはインネ
ンツきの「柳翁忌句会」の
月でもあり、雲の峰から先
生がいらんでおられるよう
にも思ったので、不才をも
かえりみず、以上代選の
弁。（不二田一三夫）

★柳歴が浅くても作句力、
常識、人格ともによれて
いる人ならドンドン勇敢に
推薦した。だがなかには毎
年推薦しても落ちる人もあ
った。「礼賛」を「れいさ
ん」または「アパート」「ア
パート」と云うような人に
は点がきつかった。

「この新記録を記念して、
ことしこそは引き受けよ」
と、いつにないこわい顔で
おっしゃった。それでもな
んとか逃げきったのだが、
こんど木村水洞氏が一路集
の「肩」の選を突然、健康

を理由にことわってこられ
たのである。
★主幹や白柳さんからばく
に代選の命令がくだった。
マゴマゴしていると編集に
こまるので、こんどはイヤ
オーなしだった。しかも今
月ははくにとつてはインネ
ンツきの「柳翁忌句会」の
月でもあり、雲の峰から先
生がいらんでおられるよう
にも思ったので、不才をも
かえりみず、以上代選の
弁。（不二田一三夫）

・募 集・

十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
近作柳樽 (10句) 田村好郎選
課題吟 (各題10句以内)

〔勤 労〕 川竹松 風逆
〔ヒンセツト〕 内藤きさ子選
〔聞き込み〕 吉田水車選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選
近作柳樽 (10句) 田村好郎選
課題吟 (各題5句以内)

〔錠 前〕 丸川初雨選
〔グッドバイ〕 野田繁身郎選
〔忘れろ〕 中村九昌平選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

麻 生 路 郎 著

新 川 柳 鑑 賞

珠玉五百数句の圧巻

定価 250円 送費 120円?
B 6 版 250 ページ



浜田久米雄著
麻生路郎序
川柳句集

定価 三百円
送費 七十円?

川 柳 句 集

檸檬 (れもん)

橘 高 薫 風 著

A 5 版 定価 400円 (送料共)

GOLDEN
O.S.B.

の紳士服

スマートで
着心地のよい



株式会社
オーエスケー



定価 百二十円 (送料六円)

半年分 七百五十円 (送料共)
一年分 千四百四十円 (送料共)

昭和四十二年八月二十五日印刷
昭和四十二年九月一日発行

編集 中島蓬太郎
発行 大陽印刷株式会社
印刷 中島蓬太郎

発行者 川柳塔社

〒100 東京都千代田区千代田一丁目一
電話 六三〇・一七二・九八六
郵政 日本郵政・二二二・二二二

黒潮おどる 紀州路の旅



＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 第2きのくに (毎日) 12時45分発

急行 南紀3号 (毎日) 16時40分発

急行 臨時しらはま (土曜) 13時10分発

＜新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 南紀1号 (毎日) 7時45分発

夜行直通列車 (毎日) 22時07分発

●第2きのくに号は座席指定券を 他の列車
は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問合わせ・南海交通社
(541) 8686 (341) 50.8

南海電車

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広 東 料 理

豚饅 **蓬萊** 焼売

大 阪 なん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋店・心齋橋そごう店・梅田阪神百貨店
天満京阪ストアー・弁天阜頭港店・中之島サン・ストアー